

Organo de Hokkaido Esperanto-Ligo

LEONTODO

N-ro 46

4 - 1972

和文タイプ購入のために

50000円の基金を

4月末日までに

第4回連盟委員会

美しく読みやすい機関誌をつくるためにも、機関誌の定期発行化のためにもぜひ専用の和文タイプを購入する必要があります。エス文の場合ですと、会員の間にも欧文タイプが普及しており、きれいに印刷することができます。しかし、今すぐ機関誌を全文エス文にするわけにもいきません。かといつて外注することは、現在の連盟の財政では無理です。中古品ですと5万円程で手に入ります。会員のみなさんのご協力をお願いします。緊急の問題です!

目標金額 50,000円

一口 500円(何口でもかまいません。個人またはグループで、分割支払いも可)

受け付期間 4月末日まで

申込み、送金先：連盟事務局まで

振替口座：北海道エスペラント連盟(小樽)17075番

送金には同封の振替用紙をご利用ください。

なお、和文タイプ購入問題についてのくわしい経過は、本誌の第3回および第4回連盟委員会報告を参照のこと。

E N H A V O

和文タイプ購入のために5万円の基金を...	1
第3回・第4回連盟委員会報告	2
HRLT和文タイプの購入を...北島隆	6
第36回北海道大会案内	7
G. G. Pompilio氏を迎えて	8
緑屋壁白書	9
Sinprezento de Nova Membro	12
ひとこと	13
Elementa Lernejo en organo...HAMADAK	14

活動報告	5, 18-20
Vagabondi Progresintan Esp-ion	SAWAYA Y. 21
Prova Traduko de jukaroj
..... Studa Grupo por tradiki jukarojn	26
atendataj alaj tradukantoj	36
rimarko pri traduko de jukaroj	47
JAPANA-ESPERANA Vortaro por mi	HAMADA K. 49
札幌にも Esp-Domo をつくろう	55

48 編集ノート

第3回連盟委員会報告

1月9日札幌市で、出席者は高橋(prez.)、沢谷(sekr.)、星田(TES)、池本(TERO)、石黒(OEA)それにオブザーバーとして中里、兎玉、大友の各氏

1 機関誌 Leontodo の発行について

ひきつづき 事務局が中心になつて、隔月刊の定期発行に努力することになりました。美しく読みやすいものにするためには、和文の方もタイプ印刷にするようにしてはという提案が出ました。ちよと委員会に出席していた歌志内の大友さんが、手持ちの和文タイプを当分のあいだ提供して下さるとの申し出があり、とりあえずご好意に甘えることになりました。(本号の印刷がそうです。s-anino北島がタイプを打つて下さいました。感謝します。) 連盟としても専用の和文タイプの購入をひきつづき検討していくことに意見が一致しました。

2 「北海道エスペラント小史」の復刻について

s-r-o池本から調査報告を受けましたが、あまり適当でないことがわかつたので、あらためて、s-r-o石黒に謄写印刷(ガリ版)という線での必要経費の見積りを依頼。また、もしも和文タイプが何らかのかたちで手に入り、連盟自身の方で機関誌のタイプ印刷が可能になるならば、あわせて「小史」の印刷もHELで行なおうという結論に達しました。

3 Magnetfona Servo の制度確立をめざして

最近ではテープレコーダーやカセットが普及してきて、聴覚学習も可能性が一般に大きくなつているので、HELとしても、聴覚教材をそろえて会員の要望に答えたいものです。さしあたっては、各グループあるいは個人が現在どのようなテープ教材を持つているかリストを作ることになりました。手持ちのエスペラントテープまたはレコードにどのようなものがあり、教材として使用可能か否か、録音時間、複製可能かどうかをご面談でも事務局の方に連絡して下さるよう会員みなさんに要望します。あとで、教材として使えるもの、記念録音、レコードなどのリストを機関誌上で公表します。

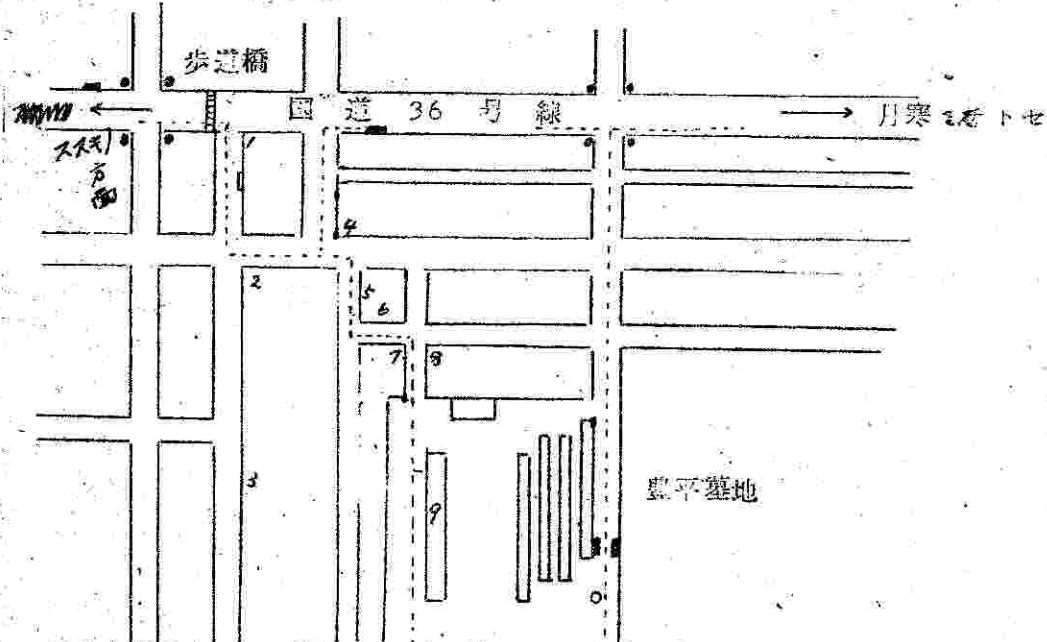
4 エスペラント展の材料を集めよう

内外のエスペラント団体の作製した講習会用のポスターを集め、ひとまとめにして、いつでも各グループのエスペラント展に提供できるようにしようということになりました。もちろん、観光パンフレットなどについても同様にしていきます。

なお、3月12日の第4回連盟委員会から場所を高橋要一連盟委員長宅(062 札幌市豊平6~9 道管住宅933号)に変更します(下記略図参照)。

komitatoj 以外の方もぜひ委員会に顔を出し、積極的に発言して下さることを期待します。

*Simpla mapo kiu montras la vojon al la domo de S-ro Takahasi



千才方面からバス利用の方は豊平駅前下車、点線のとおり進んでください
 自家用車、タクシー利用の方はススキノ方面から進行の場合 豊平駅前では
 7~22時まで右折禁止ですから、墓地前道路を点線のとおり進入してください

い、9号 アパート前駐車可能

- デンワボックス
- バス停
- 信号灯
- 1. 元豊平駅
- 2. 定鉄ハイヤー
- 3. 東急ポーリング
- 4. 北海道製鋼
- 5. 美容院

- 6. 市場
- 7. ④岩本商店
- 8. 美容院
- ⑨ 道管アパート9号
(会場2階933号)

(交通機関)

- 中央バス
五番館前又は長崎屋デパート前乗車、豊平3条8丁目で下車
- 定鉄バス
札幌駅前又は④今井向側乗車、豊平駅前又は道管アパート前下車

第4回連盟委員会報告

場所を高橋委員長宅に移して、3月12日に開かれました。出席者は、高橋沢谷、木村、石黒、池本、星田、児玉、北島、永戸の各氏。

1 和文タイプの購入について

前回の委員会での大友さんのご好意を受けて、北島さんに機関誌n-ro46のタイプを打つていただいています。けれども、提供されたタイプは、機関誌の印刷には向いていないことがわかりました。というのは、この機械は初心者にも、誰にでも使えるように設計されている反面、スピードがまったく出ないという欠点があるからです。したがって、一般によく使われている profesiaj tajpistoj 用のもの比べて3~4倍も時間がかかり、北島さんにいつまでも過大な負担をかけ、個人的ギセイをしいることは、わたしたちの運動にとつてもマイナスになります。

現在、連盟には8万円余の活動資金しかありません。中古のタイプを買うにしても、5万円前後かかります。いま、手持の資金で中古品を購入するとすれば、連盟の活動基金がなくなつてしまいます。今後の活動を長期的に考えると、現在定期に積んである6万円の基金は、確保しておかなければなりません。とはいつても、この、和文タイプを購入するか否かは、機関誌(紙)活動を軌道に乗せるのみならず、連盟のこれからの活動にも大きな影響を与える重要な問題です。残る可能な方法は、ひとつしかありません。

「中古和文タイプ購入のために、会員のあいだで寄付金をつくる」ことです。目標額5万円、一口500円として、個人あるいは、グループから、それを4月末日までに集めようということに決定。

中古品は、それぞれ可能なルートで、さつそく探してみることにしました。

2 連盟委員会費の値上げについて

1966年の札幌大会以来、連盟会費は、個人会費年額400円、団体会費300円ということになっていました。しかし、郵便料金の値上げ、機関誌の定期発行化などの活動を考えれば、とても、現在の会費ではやつていけません。そこで、委員会として、個人会員は年額800円(学生500円)、団体会員は600円(学生400円)と改正するよう、7月の大会に提案することに決めました。

3 Intensiva Kunlogado (合宿)の計画

今年もまた、連盟主催の合宿を行なうことに決定。時期としては、9月

15日(祝日), 16日(土), 17日(日)の3日間, 場所は未定。(ただし, 札幌小樽, 千才, 室蘭, 苫小牧から近く, 宿泊費が安く, 設備が整っているところ, この3条件が満たされているところを探すのにご協力ください。多少精神的苦痛をガマンすれば 昨年と同じ場所以外にないような気も?...))

4 その他

オブザーバーとして出席していた s-ro 永戸から, 文通していて, 外国から送ってくる手紙にはつてある切手を, いろいろな展示会などで即売して, 連盟とか各ロンドの資金に使つてはという提案がありました。このような面で, 逆にエスペラントが役に立っていることを, 実際に郵趣仲間に宣伝するのも, 現実に可能なことのひとつです。

連盟の財産として, 高橋委員長宅に, ダンボール3~4個分の古い esperantaĵoj があります。中には, かなり貴重な本や雑誌も含まれています。暇をみて整理し, 目録を作ることになりました。また, 適当な保管場所を見つけて公開する予定です。とくに, 地元札幌の会員が, ヒマを作つて, この作業にあたつてくれることを期待します。

次の委員会は, 5月14日(日), 同じ場所で開かれます。

NUNA STATO DE Hakodate Esp.-Societo

Post longa vintro dormado, nia grupo, HES, pli kaj pli multigas membrojn. Nuntempe dek du gesamideanoj estas registritaj en nia grupo. Speciale ĝojinde estas ke junaj membroj aliĝis al nia societo. Ni, unuigante tian junan forton, projektas novan disvolviĝos por nia movado.

Nia agado lastatempa estas jene:

En la 27a kaj 28-a de novembro, ni okazigis intensivan kunloĝadon ĉe Junokana en Hakodate. Inkluzive de s-ro Kitaĝo el Esasj, partoprenantoj estas ses.

La 14an de decembro naŭ gesamideanoj kolektiĝis por festi naskiĝtagon de Zamenhof.

Kurson ĉe la unua branĉo de Hakodate urba biblioteko remalfermis s-ro Josida de la 14-a de januaro.

En la 18-a de jan., ni havis kutiman kunsidon kaj novjaran festenon. Sep gesamideanoj ĉeestis por festi novjaron, kaj konsiliĝis denunan agadon de HES.

HELで和文タイプの購入を!

HELの事務局長を沢谷さんに押しつけることの交換条件(?)として、出来得る限り手助けしましょうと言つた手前もあつて、中古和文タイプ購入のことを取り運んでくださるよう提案しておりましたが、HELの財政的なこともあつて、すぐにといいわけにもいかず、タイプであればたいして違いはないだろうという経験者以外の方たちのご意向で、言つてみれば、押しつけられたみたいで、この号からタイプを引き受けました。大友さんのご好意に、私の我ままを言つている場合でもないし、タイプをはなれて8年近くなるんだから、どんな型でも、などと軽い気持がアダになつたみたいに相当な時間をタイプにかけるハメに陥りました。しかし、武士の一言(?)と私の意地も手伝つてこここのところガンバッテいます。

HELの体制をたてなおすためには、まず第一に相互の連けいを保つことにあると考えます。そのためには、少々内容がソマツでも定期的に機関誌を発行することを第一にしなければならぬし、そのことがHELの強化、組織化につながるという考えのもとに、私のできることでの協力をということが、タイプ購入という提案になつたわけです。

努力の甲斐あつて(?)スピードに乗れるようになつたりですが、とにかく時間がかかりすぎます。浜田さんのvortaroのようなものは相当の時間がかかります。そんなわけで、HELのみなさんに助けていただきたいのですがいかがでしょうか?

中古の和文タイプ1台4~5万円で入手できるようです。10年は使えるでしょうし、今より時間が短縮されるのは目に見えております。その分を、例えば、小史の復刻やら地方会の会報などのお手伝いにもまわせると思います。

会員のみなさんが2~300円タイプ購入のためにご厚志を寄せてくだされば購入できると思います。今すぐにといいことでなくて納纏ですが、私のこの提案にご賛同くださる方の多いことを期待します。(北島)

「第36回北海道エスベラント大会」のお知らせ

La unua informilo de Hokkaido-Kongreso

ことしの大会は、定山溪温泉の奥、景観に恵まれた中山峠で開くことになりました。多数の samideanoj のご参加をお待ちしております。

予定している programo は次のとおりですが、日程などの詳細は追ってご案内いたします。

- 1 日 時 1972年7月8日(土)午後4時から
7月9日(日)午後3時まで
- 2 場 所 中山峠健民センター トレーニングハウス 12
(044-03 北田郡喜茂別町字川上)

3 費 用

一 般	(参加費)	2200円	(申込金)	700円
学 生		2000円		500円
子 ども		1300円		300円
不在参加		500円		500円

＊申込金は参加費に含みます。

(注) 7月8日のみ参加の方は、申込金と同じ額です。

参加費には、宿泊費、8日の昼食代、記念写真代などを含みます。また、8日のみ参加費には、8日の昼食代、記念写真代などを含みます。

4 参加申込

6月中旬までに申込金を添えて下記へお申込みください。

060 札幌市南2条西4丁目 中央タイピスト学院内

札幌エスベラント会(TEL 251-4750)

振替 小梅 8310

または、北海道エスベラント連盟 振替 小梅 17075

5 大会準備委員

SBSとRNから、次の membroj が準備委員として活動しています。

委員長	吉 原 正八郎			
副委員長	木 村 喜生治			
委 員	藤 井 重 雄	江 口 正 元	黒 川 恵 美 子	
	那 須 博 文			
会 計	西 館 京 子	楳 正 子		

G. G. ポンピリオ氏を迎えて

2月13日夜、まさに世紀の冬季オリンピック大会の終幕を告げる聖火が消えやんとする頃、札幌市の一隅で、G. G. ポンピリオ氏を迎えるエスベラントの炬火が温くともりはじめた。

オランダ国籍をもつイタリアの人、そして現在、東京で日本女性の奥さんと2人のお子さんに恵まれた真の国際人、ポンピリオ氏は、イタリアの特別(委嘱)記者として、また、東京に支社をもつ貿易会社の報道記者として、冬季オリンピック大会の取材に来札された折である。

ポンピリオ氏については、1965年 東京で開催の第50回世界エスベラント大会に常任書記として数カ月間滞日し、その間2度も来道されて道内エスベラントテストとの知己も多い。更に、現在UEA書記として大活躍中の札幌出身の永田明子さんとは、数カ月間オランダのUEA事務局で机を並べたゆかりもあつて、札幌でのエスベラントテストとの再会を強く望んでいた。

その日の参加者は、札幌市の高橋、木村、吉原、清水、堀、那須、田村、苫小牧の星田、児玉、北島、千代市の中里、池本のほか、偶然札幌に居合わせた歌志内市の大友、名古屋市の三ツ石の14名であつた。

およそ2時間半にわたる歓迎会は、ビールによるほろ酔い気分もてつだい、テンブラ料理に舌つつみを打ちつつ、終始和やかな談笑に満ちていた。

それは、彼独特のユーモアまじりの流暢なエス語の駆使に、決してめげることなく、堂々とセスチャー一杯でわたり合つた歌志内市の大友、名古屋市の三ツ石両氏の大活躍が、この会のふん囲気を一層盛りあげてくれた。

解散後、児玉、北島、清水ほか2名の学生とともに kafejo でポ氏との別れを惜んだ。

なお、ポ氏は、別れ際に、3月中旬、冬季大会の取材整理のため再び来道すること。本年7月の北海道大会には、家族との北海道旅行を兼ねて是非出席したい希望をもらしていた。

ENTREPRENA RAPORTO de

Librejo VERDA STELO

緑 星 堂 白 書

Kiom da esperantaj libroj vendis LVS dum ĉi tiu unu jaro, dec., '70 ~ dec., '71 ?

魔留世離 小頭郎

'70年12月のZ祭を皮切りして始まつた、わが道内唯一のエスペラント書籍専門店と自負する(?) "緑星堂" の実績を、ここに公けにして、過去1年間の運動を、書籍という側面から見てみよう。

その前にまず、緑星堂の経営について書こう。微弱な資本による個人経営であるがゆえに、資金のやりくりに気楽なところもある反面、当然のことながらそれだけの限界もある。売れた本をただちに注文して、いつでもある一定の在庫数を保つておくのがよいであろうが、代金がそのまま、mano al buŝoということになつているのが実情である。まだ間接税以外に1円の税金も払つていない身分のものが経営しているのであるから、無理もないことであろう。現在のところ約2万円ぐらゐの在庫を持つてしていると推定される。

本の入手は、主として、北大生協の書籍部を通してJBI(日本エスペラント学会)から取り寄せている。(自分の専門書を注文せず、ヒンバンにエスペラント書ばかり注文するものだから、書籍部のカワイコちゃんもすっかり心得たもので、余を見ると、すぐ注文伝票簿を調べずとも、本が入荷しているか否か言つてくれるようになった。注文してから10日で入荷するようだ。) JBIにないものはKLEG(関西エスペラント連盟)から、ただし、この場合は郵送料がかかる。現在はKLEGから取り寄せた本は「北海道価格」(定価+郵送料)で販売することにしてゐる。最近では、休みに大阪へ帰省する学生にたのんで、KLEGから本をかついできてもらうことも試み、「北海道価格」の解消にも努めてはいるが、それにしても、2月からの第1種郵便料金の値上げは、われわれのごとき ささやかなる文化運動にとつて、重大な危機をもたらすものである。一刻も早く、巨大資本にのみ奉仕している政府を打ち倒さねばナランと余はつくづく考えるのである。

さて、いかなる本がどれだけ売れたかは別表のごとくである。ここにのせたのは、記録に残つてゐるものだけ。辞書類27, 入門・学習書104, 絵本・童話40, その他58, 大小あわせて計229冊。ベストセラーは何といつて

Venditaj libroj ĉe LVS de dec., '70 ĝis dec., '71

VORTAROJ

新選和	8
和語小辞典	5
和語	7
PV	2
OVO	4
Teach Yourself	
Esp.-English D.	1

LERNOLIBROJ

新編程度 vol.1	31
“ vol.2	9
“ vol.3	6
A Practical Course	
in Esp.	19
Privilegia Vojo	7
Esp. por Inf.	1
A School Esp. Course	1
Ĵambolea Lingvo	1
基礎 エスペラント	1
エスペラントの基礎	1
エスペラント発刊	3
絵入読本	3
前置詞の研究	3
作文の教室	4
和文エス語研究	9
文通案内	6
日英会話練習帖	1
Petro	1

FABELOJ k BILDLIBROJ

神壇イソップ	10
チェコ童話	5
日本の昔話	1
La Varma Sudo k.	12
Ĉasado kun A.....	7
Rakontoj pri L.H.	3
Sekreta Informilo	2

NOVELOJ k LA ALIAJ

原爆体験記	2
戦場の村	2
Leteroj el Ĉinio	1

Vortoj de prez. Maŭ	2
Ele. Verkoj de Maŭ	2
Ŝtato k Revolucio	1
Lingvo, Stilo, F...	1
Lapenna	1
Rakontu, Samideano	2
Sub la Signo de la..	1
Kie la boacoj vag...	1
Dekkinga Fuĝas	1
La forto de l'vero	2
Esperanta Mozaiko	1
Pardonon	1
La Nova Testamento	1
Sen Eliro	1
La Tempesto	1
Aŭtuna Foliaro	1
malsata Ŝtono	1
Fronto k Postfronto	1
de A..	1
Fundamenta Krestom..	1
Franjo Tu Hau	1
La fajra elprovo	1
Kun la defend. de K.	2
La ebura kombilo	2
Nord-V. kantau US-A.	1
Hon Dat.	1
Tra la liberigita Z.	1
Sovaga Kokino	2
Pluvas sur la Arbar.	2
Kan Lik	1
La Drinkojo de l'M.	2
La Vjetnama k ĝia..	2
Prez. Ho Chi Minh	2
Unu jarcento de NL	1
La tradicia Vjetna..	2
Indaj ĝefiloj de L..	1

エスペラントの世界	3
エスペラントの話	2

も、新エス講座 vol.1 の 31 冊、次いで A Practical Cours in esp. の 16 冊、これは RN でテキストに使つたためと、値段が安いことから人気を呼んだようだ。最近で、中国の児童向け絵本がよく売れている。(値段も格安)

新エス講座 vol.1 は、昨年札幌での 2 つの展示会で即売したものが 10 冊くらい含まれている。入門書はとにかく、初級講習会の受講生はもとより、エスペラントに関心を示した知人にも積極的に売りつけた。しかし、新エス講座 vol.2,3 の販売数、あるいは、他の学習書、辞書などの売れ行きを考えてみると、そして、一般のエスペラント書のそれを考察してみると、緑星堂の活動範囲が札幌中心に限られていたとはいえ、現在の道内のエスペラント界の nivelo を反映しているといつてよいであろう。内容のあるエスペラントの本を読みうる人を多数育てていかなければ、エスペラント運動にとって本質的欠陥になるであろう。ウソかホントかは知らぬが、「第一級のエスペラント書は 1000 部売りつくすのに 10 年はかかる。」といつたようなことを耳にしたことがあるが、こういうことは、早いところ、エスペラント運動史の昔話にしてしまいたいものだ。とくに若手は、ドン欲に、金のあるだけ買うのみならず、それを読破してほしい。(余自身も最近ばめつきり “ツン読” が多くなつた。これは自分自身へのいましめでもある)。読むことは krei するための基礎作業である。今年 UNESKO の “国際書籍年”。内外のエスペラント書をおおいに読もうではないか。読むためには、まず本を買え! とまあ、日頃の持論になつて 営業報告からだいぶ脱線してしまつたけれども、今年、エスペラントをはじめ 1~2 年の人にと「押し売り」して、一般の本を読めるように、エスペラントを楽しめるようになってもらうよう、営業の重点をおきたい。Karaj gesamideanoj, Ĉu vi estas pretaj?

(Malseri Ozulo, estro de LVS, Sapporo)

Esperanto kaj Esperantistoj en gazetoj

- * 「数理科学」2月号 言語特集の中に高杉一郎が “国際補助語について”
- * 「現代の眼」2月~4月号の3回にわたつて 辺見吉三が “山鹿泰治・人と生涯” と題して、esperanto と anarkismo ” のことを
- * 「文化評論」4月号に 熊本秀夫が昨年10月に日本の esperantistoj として、はじめて、北ベトナムに行つたときの訪問記を、

SINPREZENTO de Nova Membro

中 森 美和子 さん(函館)

エスペラント この言葉を耳にするたびに何となしに引きつけられ、とても興味深く、いつかはきつとふれてみたいと思い始めたものの、このような容易な動機であきつばい私の性格がどこまで続けることができるかどうか不安でしたが、不思議と途中で投げだしもせずここまでできましたのも、英語などにくらべ例外が少なく、人工語という特長を生かし素直に入っていくことができるというところに魅力を感じたからではないかと思います。

今のところ独学でやっておりますが、4月からは耳を養うためにも週1回の講習にも出ようとはりきつております。しかし、きまりきつた学生生活から遠ざかった今日、多忙でなかなか思うように時間が作れず残念ですが、できるだけ自分にむちうつてマイペースで進んでいこうと思っております。

世界には約7200万人のエスペランティストがいらつしやるてうですが、公の国際間での交渉は、特に、英、仏、スペイン語などを公用語とし各国の実情に応じて使用されている現在、何んでも合理主義とさわいでいる中で言葉のみがこのように不合理なことをしているとは、いくらいろいろな事情があるにせよ、何ともふにおちないような気がいたします。

また、エスペラントも義務教育に採用できたらよいのではないかと思います若い時に慣れ親しむことにより 共通の理解を広めるうえできわめて重要ではないかと思ひますし、また、私のように特別の目的を持たない者が、強制化することにより、より真剣に取りくむことができるのではないかと思ひます。

ともかく これから私自身いろいろな障害があるとは思ひますが、私なりの考えで一生存ん命やつていきたいと思ひます。

★ NF紙廃刊！

昨年8月の大会後、n-ro 7から同人紙として再出発した "Noĝflokoj" は、3月、n-ro finaをもつて廃刊となつた。同紙は、71年1月からほとんど月刊を保ち、8月まで、實質的な道内の機関紙の役割をはたし、沈滞気味のエスペラント界に、新しいいぶきを与えた事實は 誰も否定し得ないであらう、それにしても、現在の道内のエスペラント界では、同人紙(誌)の存在する余地はないのであらうか？

ひ . と . こ . と

44号にのせた私のAINO-KALKULADO に対して、日高町の向井氏から severa kritikoを受けましたが、私は komencantoの方々も、ごく手近かにあるものから気軽にエス文の練習のつもりでやつて見てもらいたいと思つて、まず手始めに私のものを投稿しました。

向井氏に聞き直られると、なるほど私がうかつに出したのは申訳ないとあやまる外はありませんが、これは en antikva tempo, en la feudala epoko のころの話、今に言い伝えられる昔話。これに kalkulado laŭ Aino-maniero と付け加えたとき、私もオヤこれはおかしい(いけない)と思つたが、結局「アイヌ勘定」という言葉があるままに訳したため、向井氏のおつしやるとおり「シャモ勘定」であるわけで、もし副題をつけるならば "ruza kalkulado de komercistoj" とでもすべきでした。

あまりむきにならず、私も作文練習のつもりですから、皆さんから何でも遠慮なく批評し、誤りも指摘してくださるよう願います。

(小樽 山 賀 勇)

(この欄に 会員のみなさんの近況、"LEONTODO"についての感想、意見、批判などを気軽に書いてください。この欄にかぎり、ハガキでも結構ですから、事務局の方へお寄せください。"ひとごと"ではなく、ひごろの esperantista vivoの中から出てくるあなた自身の"ひとごと"を Red.)

INTER NI

s-ano 影 浦 英 明

3月下旬 東京都へ転勤。

東京都江東区木場4丁目14番1号

イワクラビル内55号

s-ano 稻 村 崇

教養課程を修了して東京の駒大歴史学科へ。

東京都目黒区緑が丘3-5-15

s-ano 大 島 俊 之

室工大大学院修士課程を卒業して4月から北見市へ。北見市で新しい rondo の結成を期待

La 5an, 1, 1972

HAMADA, Kunisada

Leciono I Por Klerulo ne leginda!

De nun mi volas babili pri situacio kaj aliaj aferoj
koncerne al edukado.

「貧乏人は麦を食え」のfifamaなことばを残し、麦も食えないで死んだDef-
ministro Ikedaが、首相就任のintervjuoで、「私は、これから、まず
あなたがた新聞記者を優遇します。それから教員と裁判官も優遇します。」といつ
たそうです。

教育は政治から中立でなければならぬといわれますが、事実として、日本の子
どもが日本の土地で教育を受ける以上、そこに親が住み生活しているわけですから
日本の社会の政治から離れて教育が行なわれるということは不可能なわけです。
(浜中町の島に住んでいるムツゴロー博士も子どもは霧多布小学校に通わせている)

日本中に安保がゴロゴロしている状況の中で教育界もその例外でなく、むしろ
bona ekzemploだと思います。マスコミと教育と裁判所の反動化の三題は、安
保と無関係でしょうか。

2, 3の例をあげてみると、マスコミでは報知新聞の闘争、田 英夫と週刊朝日
の事件があり、裁判所では、憲法の番人である裁判官が憲法を守つたということで
罷免され、任官拒否があり、教育では、家永教科書検定訴訟、中教審答申、近くで
は村田事件と教かざりがありません。

1953年10月、池田・ロバートソン会談がワシントンで行なわれたとき(MBA
の下相談)、日本側から再軍備するには4つの制約があるといいました。それは

- 1 憲法、とくにその第9条がじやまになる(法律的制約)
- 2 学校の教師が平和教育をするのがじやまである(政治的、社会的制約)
- 3 費用が足りない(経済的制約)
- 4 短期間に青年は集まらない(实际的制約)

アメリカ側はこれをみとめて援助を約束し、日本側は「日本に“自衛のための自
発的精神”つまり再軍備したい気持ちが起こるようにしてみせる。それには教育と

マスコミを使つて必ずやつてみせます」と約束して帰りました。これ以来、教員の政治活動を禁止しようとし、社会科を改題し、教育委員を任命制にし、教科書を検定で悪くし、教師には勤評、子どもには道徳教育、学テでしめあげてきたのです。これがさきの池田首相の発言となり、ここにも安保があつたのです。

教員の優遇策最近のものは教育公務員特例法です。これは超勤手当を出さないで、(教員に超勤はない。裁判にかけた分だけ支払われている)月4,5千円で帳消しにしようというものです。そして、その損をとり返すかのように、いまへき地教員に与えられているへき地手当をダウンさせようとしています。

これが経済大国日本です。悪女の深情です。いやでも離れられないのも日本です。

ILOとユネスコの「教員の地位勧告」など国際的、国内的世論によつて家永訴訟は勝訴しました。杉本判決の全体を貫く底流は、

- 1 子どもは生きるために、そして労働するために、科学、技術の基礎を修得する権利をもっている(学習権)
- 2 親が子どもに教育する教育権
- 3 その専門性のゆえに、親から教育権を付託されて子どもの学習権を保障する教師の責任(教師の教育権)

ということだろうと思います。

だが「マスコミ近代化」の中での子どもたちをどうするか、大きな課題だと思えます。きくところによると、いまのテレビ、ラジオは緊急事態が起きたときにはスイッチを切つても放送がはいるように改良?されているそうです。

これで思い当るものに1951年(S26)4月、米上院でのムント議員の発言があります。「弾丸を使わないで共産主義の脅威に対抗しうるアメリカ最大の武器として世界にテレビ網"Vision of America"を建設せよ。とくに最初に必要な国は日本とドイツであり、日本全土にくまなくテレビを普及するための費用は460万ドルであつて、B36爆撃機わずか2機分にすぎない」

それから20年、いまや日本の全家庭にテレビがあるのです。En mia hejmo televidilo ne estas, nur anteno estas.

ここで思い出すのは、京都の「教育を守る10項目」です。

教育は 子どもだけでは守れない。

親だけでも守れない。

先生だけでも守れない。

守るだけでは守れない。

Nu Kion ni faru?

—15—

(daŭrigota)

EL NIA LETERKESTO

*(novjarkarto de f-ino A. Nagata)

ĝojplenajn Kristnaskotagojn kaj feliĉan Novan Jaron

(住所変更; Onder de Beumkes 29, Velp(Gld.), Nederlando)

*(novjarkarto de Takacuki E-soc.)

PACAN NOVJARON!

あけまして、おめでとうございます。

本年もまた、国際語エスペラントの普及と、住民の手による、ゆたかな文化をき
ずくために、力をつくします。

大阪府高槻市天王寺町20-10 高槻エスペラント会

*(novjarkarto de RH)

Feliĉan Novjaron!

al ĉiuj esperantistoj en Hokkaido.

Dankon, ni, Rondo-Harmonianoj ricevis vian organon, Leontodon

Do, vi kaj ni kune agadu antaŭen por Esperanto.

アイヌ民話 エス研研究会, 非常によいことだと思います。この研究会が活動し、
本を発行できるまでになるように心から望みます。

京都市下京区堺町仏光寺上ル

国際語教育協議会(Rondo Harmonia)

*(karto de Ŝikoku ESP-lig.)

Elkore mi dankas vin por Leontodo, N-ro 45('71)

Bonvolu amase aligi al la 59-a Japana Kongreso ĉe

Takamatu la 15-an k. 16-an de julio, 1972!

第59回日本エスペラント大会事務局 振替 徳島20644

Vidu dec. n-ron de R.O. aŭ La Movado pri detalo

Ŝikoku Esp.-Ligo

川村 信一郎

香川県木田郡三木町

香川大学農学部農芸化学科

RAPORTO de DELEGITO

Kimiharu Kimura
(Sapporo Esp.-Soc.)

Laŭ la Vintro-Olimpiko, Sapporo fariĝis fanekonata urbo en la mondo. Tion pravas 20 kelkaj leteroj jenaj, kiujn mi ricevis dum lasta duonjaro. Sed bedaŭrinde preskaŭ el ili ne enmetis respondokuponon, sed al ciuj mi respondis kaj sendis.

el Finnlando (Salo); Sendu katalogon de Japana LLS (Lingvo Lerno Sistemo) ekipaĵo.

" " (Turku); Kontaktu al ĵurnalistoj de mia lando kaj utilu ilin por esperanta propagando.

el Usono (Indiana); Pri SO (Sapporo Olimpiko) kun eltrancita ĵurnal-artikolo kaj rapida progreso de Japana industrio ktp.

el Polando (Parszawa); Volas korespondadon pri teorio de elektrona komputero en Japanujo.

" (Kielcach kaj Czestochowa); Sendu al mi la propagadilon de SO.

el Germanujo (München); Aŭdis la radion de Varsovio (Polujo) ke en Sapporo Esp-interpretistoj servos, sendu propagadilon de SO.

" (Strabe) GDR; Sendu al mi poŝtomarkon (PM) de SO.

" (Rostock); Sendu al mi PM, kaj volas korespondi.

" (Lohnel); Okaze de la Olimpiko propagandu Esperanton per enmetita afiŝo, se bezonas pli multe sendu al mi monon.

el Francujo (Grenoble); Gratula SO-n kaj volas fariĝi ĝemelsocieto kun via.

el Brazilo (Fora); Esperanto bezonas propagandon, por kiu bezonas mono, pro tio aliĝu al mia GEX (Grupo por Esperanto en la Komercio).

Aliaj leteroj nun ne estas en mia mano.

グノーブルからの手紙

SapporoのUEA-delegitoである本村さんのところに
次のような手紙がありました。(Red.)
Sapporoのエス会と姉妹関係を申し立てたい。

Grenoble, la 9an de februaro, 1972

Estimata samideano,

Mi skribas al vi je la nomo de K.E.S.O.G: la Kultura Esperanto-Societo Grenobla, kies prezidanto mi estas. Mia leteraro direktiĝas ne nur al vi, sed ankaŭ al la tuta Esperantistaro en Sapporo. Mi petas vin transdoni ĝin laŭeble; dankon!

Dum mi skribas, atletoj el multaj nacioj kuniĝis en via urbo kaj luktas en pacaj bataloj por konkuri olimpikajn medalojn. La nomo SAPPORO famiĝas en la mondo. Akceptu niajn gratulojn pro la bona organizado de tiuj ilaj vintraj olimpikoj, pro la belaj bildoj, kiujn ni ricevas sur la ekranoj de niaj televid-aparatoj, malgraŭ la distanco kaj la malhona vetero. Ni deziras, ke tiuj olimpikoj finiĝu en apotezo kaj helpu al la elvolviĝo de via urbo, ankaŭ de esperanto, utilu al la paco plektante novan reton de amikaj rilatoj inter la homoj.

Certe vi scias, ke la antaŭaj vintraj olimpikoj okazis en nia urbo "Grenoble". Inter la "olimpikaj" urboj estiĝas amikaj ligiloj. Ekzemple, nia urbestro S-ro Dubedout troviĝas nun en Sapporo; li estis invitita de via urbestro por transdoni la olimpikan flagon. Do, tial ke niaj urboj estas kvazaŭ ĝemeligitaj, kial niaj Esperanto-Societoj ne farus same?

Ja, nia KESOG estas tre eta societo, tre malriĉa, preskaŭ mortonta, (nur 40 kotizantoj; el kiuj ne pli ol 3 au 4 aktivoj maljunaj, ofte malsanaj).

Esperable, en Sapporo la movado estas pli vigla, la societo(j) pli mult-nombra(j), pli riĉa(j), pli potenca(j).

Nuntempe, organizado de regiona kongreso esperantista ege okupas min. (Pro tio mi ne povis skribi pli frue al vi malgraŭ mia deziro) La kongreso okazos la dimanĉon, 19an de marto; ni atendas centon da kongresanoj.

Je la nomo de KESOG mi invitas vin aŭ alian esp-iston el Sapporo partopreni ĉi tiun manifestacion. Bedaurinde ni ne estas sufiĉe riĉaj por pagi al la venonto la vojaĝ-elspezon, sed kun plezuro ni gastigos lin dum 2 aŭ 3 tagoj. Se, pro la graveco de la vojaĝ-elspezoj au pro aliaj motivoj, neniu esperantisto el Sapporo povus veni, ni estus tre dankemaj al vi sendi salut-leteron, kiun ni legus dum la kongreso.

Tia letero povus helpi al ni por montri al aŭtoritatuloj

Rondo Rondo より、報告

私達の活動も尻すぼみに、昭和46年度の活動を終え
よすとしています。昭和46年度の活動は、北大祭展示、
ピクニックと華々しくスタートしたのが、残念なことに、五祭を
終えてから、つまり、昭和47年に入ってからというもの、会員の
例会出席率の低下などのため、現在、4、5人で細々と
した活動をしていきます。

出席率低下にはいろいろ原因があると思われ、最大の
原因といえるものは、会員のEに対する意欲の
低下。その意欲の低下をきたした、例会運営のまよまよ
といったものが、挙げられると思います。

例会運営の円滑化するため、設立された、R.N.研
究会も、発起者の時間、都合で自然消滅してしま
いました。

昭和47年度の活動内容を決定するための総会を
4月13日(木)に、北大15-1会館集会室にて行予定です。

↓ la valoron de esperanto.

Estimata Samideano, bonvolu akcepti niajn antaŭdajojn
kaj la esprimon de niaj fratecaj sentoj por vi mem, an-
kau por viaj samurbanoj.

EKSPozICIO: ĈINA ESPERANTO-MOVADO

Sukcese finiĝis en fitose

En fitose de la 14-a ĝis la 16-a de januaro, ni havis ekspozicion kun temo de ĈINA ESPERANTO-MOVADO ĉe ekspozeejo de "BEIJING", la plej freŝe kaj moderne konstruita placo en la urbo.

Dum la tri tagoj vizitis ĉirkaŭ 300 urbanoj. Preskaŭ ĉiuj vizitantoj jam sciis almenaŭ la nomon de Esperanto pro nia unua ekspozicio en la lasta novembro, sed por ili estis la unua fojo sci la vigan esperanto-movadon en Ĉinio, nia najbara lando!

Ĉi-foje nia celo estis, ke ni sciigu al urbanoj ne nur la nomon aŭ simplan karakteron de nia lingvo, sed ankaŭ veran movadon de Esperanto per pli fiksita temo ol en la lasta ekspozicio. Ankaŭ estis la celo, ke ni disvendu esperantajn librojn tiukaze, ĉar en la unua ekspozicio vizitantoj ege deziris aĉeti la librojn ekspozitajn. En tiu ĉi ekspozicio ni povis vendi entute ĉirkaŭ dek mil enojn da libroj, kaj krome povis akiri tre fervorajn freŝulojn de TERO!!

Sen tiuj fruktoj, nia ekspozicio sukcesus; kelkaj vizitantoj diris, "Mi neniam sentis Esperanton tiel proksime al mi, kvankam la nomon mi jam sciis." "Mi iam lernis Esperanton, sed post la milito mi tute ne havis okazon vidi la movadon de Esperanto. Estis ĝojanda ekŝi, ke Esperanto travivadis post la milito!" Al tiu ĉi vizitanto Esperanto estis kvazaŭ la s-ro Yokoi, ektrovata en ĝangalo de Guam, ĉu ne? Do, kio faris Esperanton kiel s-ron Yokoi? La Esperantistoj mem ne respondecas ĝin?

Fine ni devas diri. Dank'al la sindona kunlaboro de s-roj Hoŝida kaj Nagato, nia plano povis havi la fruktojn.

— 20 — (IKEKOTO-Morio
vic-ĉefe de TERO)

Vagabondi Progresintan Esperanton

SAWAYA Yūiti (Sapporo)

Meze de februaro, mi havis ŝancon veturi al Kioto por ĉeesti studkunsidon koncernan al miaj fakaj aferoj. Post tiu studkunsido mi vagabondis "progresintan esperanton". Ĉi tie mi prezentos raporton de mia vojaĝo.

La 17an de februaro, vespere, mi unue ĉeestis kunsidon de "Rondo Juna" (kunsido por junaj komencantoj de OES) ĉe Junulara domo en Morimomiya. Iom granda kunsido estis dividita, kaj en unu ĉambro komencantojn gvidis s-ro Kurihara, en la alia oni havis kunsidon kun gasto el Aŭstralio, 15jara knabino, kiu venis al nia lando fine de januaro kiel interŝang-lernantino inter ĝemelaj urboj Ikeda kaj iu en Aŭstralio. Baldaŭ komenciĝis bonveniga kunsido kune kun la komencantoj. OES havas sufiĉe multajn talentulojn ĉekape de juna prezidanto Cubota!

Ekzemple, s-ro prezidanto bonhumore prezentas al la komencantojn ĉi tiun eksterlandan samideanineton, tute nature, kun serioza mieno; "Tiu ĉi estas fame konata s-anino Ides Hanson.." Ĉiuj ĉeestantoj ekridis. "Kio estas via nomo?" demandis li al la knabino. Ŝi ridete flustris ŝian nomon al la prezidanto. "Ne, mi eraris! Ĉi tiu estas f-ino Ides Gibson" ktp., ktp. La tute gajan atmosferon bonhumore ĝojan plie amplifikas samideanoj Misawa, Kurihara, Hara kaj aliaj anoj.

Iom poste venis alia gasto. Kiu? Wijmer! Mi eĉ ne imagis rerenkontiĝi kun li ĉi tie en Oosaka! Mi supozis, ke li jam atingis Aŭstralion kaj vajaĝas tie, ĉar li diris al ni tiel, kiam li venis al Hokkajdo. Li bone memoris min. Iu grava mis-skribo de koncerna buroo sur trakta papero pri la motorbiciklo prokrastis la ekveturon, kaj tio ŝanĝis lian vojaĝ-planon, Diris li, ke li ekveturos de haveno Kōbe al Singapore per ŝipo kun sia amatino "HONDA" por iri hejmlandon tra Mez-azio, sekvantan dimanĉon.

Post ĉi bonveniga kunsido, ni kvinope, t.e. s-anoj Misawa, Kurihara, Hara, Wijmer kaj mi, eniris por babilo en iun kafejon proksiman al la kunsido. S-ano W konfesis, ke li estis tute "sovaĝa esperantisto", ĉar li mem neniam sciis nunan staton de Esp.-Movado, malgraŭ ke li venis el la lando, kie troviĝas oficejo de UEA, sed nun, pere de sia patro, esperantisto, kiu konsilis lin lerni nian lingvon antaŭ la vojaĝo al nia lando, li oficiale aliĝis al UEA kaj ricevas organon "esperanto"n. El multaj travivaĵoj dum la travojaĝo, li trovis tre strangan fenomenon, ke neniu sinjorino de esperantisto, krom s-ino Ikemoto, alparolis al li en esperanto, eĉ se la edzo havas pli ol dudek aŭ tridek jarojn da esperantista vivo! Trafe!! Li certe havas akrajn okulojn kaj precize observas

esperantion en nia lando. Li demandis tion al ni, ĉar li vidis multajn fraŭlinojn-esperantistinojn en ĉiu loko. Ĉu esperantistaj edzoj ne edukas diligende kun ardo sian edzinon, aŭ ĉu ili estas estimataj sinjoroj edzoj en hejmo, kion montras frazo en la Teksto, "la japana edzino servas ĝindone al la edzo, dum ĉi tiu lasas ŝin hejme ĉiun vesperon! Ĉu sinjorinoj estas ĉiam tro okupataj? Nia babilado transiris iom post iom al la temo pri "esperantistinoj" Iu diris, "S-ro K jam trovis kandidatinojn kaj baldaŭ..." "Ne, absolute ne! Sed, kiu diris al vi tian aĉan onidiron senradikan? Ŝi havas malvarman koron kaj amas nur riĉajn kaj gajajn sinjorojn." "Ne, tiu bona frazo estas ne via, sed en la Teksto Unua!" "Nu, nu, kiu fraŭlino?", persekute demandis s-ano W, elpoŝigante memorfoton de Z-festo, tuj antaŭe donacitan de s-ro K..... Kaj senĉese ekspansiigis "taksado de l' kvalito en pluva vespero".

Sekvantan vesperon, por ĉeesti kunsidon de Kiota E-Ligo (Rjoksei-kai), mi veturis ree al Kioto. Tie mi povis vidi, por la unua fojo, famajn samideanojn; nome, s-ro Saito Eizo, redaktoro k eldonanto de tute esperanta, dumonata kultula gazeto, unu sola en nia lando, "l'omunibuso", lukse enhavoriĉa. S-ro Hugiimoto Tacuo, la aŭtoro de tre interesa libro "Problemoj de Intereso", eminentulo, fama oratoro, kiu vojaĝis orientan eŭropon por labori per esperanto, t.e., por kolekti materialojn de EKSP0 '70 en Ŝosaka. S-ro Haneda Akira, sekretario de Rjoksei-kai, kiu nun gvidas elementan kurson okazigitan de Japan-Sovetunia Amikeca Asocio.

Ĉeestis 6 samideanoj. Tiuvespera kunsido, estis Ĝenerala Kunsido de Rjokusei-kai. Ŝajne multajn komencantojn timigis firma decido havi kunsidon tute esperante en ĉiu tria jardo, ĉar tiu principo estis aplikita, hazarde, al ĜK. Tio estas epokfara afero por Rjokusei-kai, oni diras. Tie en ĜK, ^{oni konsideris mi} al-tigo de membrokotizo, plano de agoj por ĉi jaro, havi piknikon en marto (Ja por ni estas eĉiinde, ke oni povas havi piknikon ĉi tie en marto!), instigi anojn partopreni en Intensivaj kunloĝadoj k Kongresoj, ktp., ktp. Sed estas universala vero, ke ĉiujn rondojn k samideanojn suferas la samaj problemoj en ĉiu loko!

En la 19a tago, posttagmeze, vizitis mi oficejon de KLEG, la Kastelon de Esp.-Movado. Min bonvenigis sekretariestro s-ano Miyamoto. Ankaŭ iu fervojista samideano el Okajama estis tie. Mi, antaŭ ĉio, rigardis librobretojn de KLEG, kaj aĉetis tiom da havindaj libroj, konsiliginte kun mia monujo, ke mi ne povas ĉiun dum unu jaro, kaj povus bone dormi, se mi uzus ilin ^{tralegi} anstataŭ kapkuseno. Ni babiladis,

trinkante tason da kafe, kian estimata sekretariestro mem versis por ni. Li mem trinkis kafon ne kun sukero, sed kun sakarino, ĉar la lastatempa sanstato, t.e., tendenco de troa dikiĝo pro la aĝo, ne permesas al li preni sukeron.

Baldaŭ venis s-ano Cubota, kaj tuŝis la debaton pri "recenzo" inter Miyamoto k P. Lobut, la tradukinto de "Spreno de Parizo", sur la kultura gazeto "l'omnibuso" (la 8a jaro n-ro 5 -- la 9a jaro n-ro 1). Tio ja esence koncernas al la nuna nivelo de Esp.-Movado k Esperanta Kulturo. Oni ne devas facile uzi vorton "recenzi" sur esperantaj gazetoj au organoj. Kio estas recenzo? Kia devas esti recenzo de libroj?????????

Kara sekretariestro Miyamoto alte estimata, al kiu iuj junuloj donas nomon "monŝtro", parolis al mi diversajn flankojn internajn k eksterajn de Esperanto-Movado k sociaj movadoj antaŭ k post la milito. Li diris fiere ankaŭ pri tio, ke nur la movado en Kansai sola havas noblan spiriton, atmosferon "krei ion novan", "labori per esperanto, kontribui al esperanta kulturo". Certe ja havas KLEG multajn unuaklasajn eminentulojn fekundajn.....

Montrilo de mia horloĝo jam forpasis la 4an horon. Mi pasigis eĉ tri horojn ĉe KLEG! Mi, fine, memorfotis s-anon Miyamoto antaŭ la oficejo per mia duonmalnova kamero tre malkare akirita, kaj ĝisrevidis KLEG.

Mi havis intencon turni min al la longtempa kunsido de "Rondo Espera", la plej nova rondo naskita en jan., '72, sed estis jam tro malfrue, ĉar mi rememoris promeson renkontiĝi kun mia amiko (bedaŭrinde, li estas ne esperantisto) ĉe stacidomo Oosaka je la 6a. Telefone mi pardonpetis al s-ano Misawa, unu el la respondeculoj de tiu grupo. Li bonvolis veni ĝis la stacidomo. Li promesis al mi viziti Hokkajdon ankaŭ ĉi-somere por ĉeesti Hokkajdan Kongreson. Entuziasma esperantisto, kiu flugas ĉien por partopreni kongresojn! Li donis al mi jenan noton;

Tiuj, kiuj vizitas Oosaka, nepre ĉeestu
ankaŭ kunsidon de RONDO ESPERA!

en ĉiu sabato krom festotago,

2:00--8:00 pm

ĉe 大阪府立福島勤労青少年ホーム (535 大阪市福島区海老江中)

2-5-9. tel. 06-453-2207 au 2357)

(kun vespermango)

En tiu malfrua nokto, mi veturis al Tokio per ekspreso, kiu atingas Tokion ĉ. la 9a, matene.

Ja tiu tago estis dimanĉo! Kvankam TEJA havas sian propran

oficejon, sed ĉu iu samideano troviĝas tie? Mi tuj telefonis al s-anino Kikuŝima por demandi, je kioma horo malfermiĝos la oficejo kaj ĉu mi povos renkontiĝi kun ŝi. Ni certigis iri al Esperanto-Domo je la 12a.

E-Domo troviĝas en la centro de ĉefurbo Tokio. Jam du gesamideanoj laboris diligente k sindone malgraŭ dimanĉo. La Domo havas du ĉambrojn, kuirejon, ktp. En la ĉambroj troviĝas kelkaj tabloj por laboro, seĝoj, libro-ŝrankoj, elektra stovo, k.a. Abande da mebloj! Bonege k eviinde estas ke TEJA povas teni per E-Domo junecan atmosferon de esperantio, ĉiam malfermitan por ĉiuj junuloj. Oni preparis elementajn samtempajn kursojn en printempo kaj Intensivan Kunloĝadon dum la ora semajno, kies informilojn mi kunportis de TEJA por Hokkajdanoj. Kvan-kam la plenumkomitatanoj tute noviĝis pro la decembra konfuzo, al mi ŝajnas, ke pli multe da junuloj laboras konscie por teni kaj antaŭenpuŝi la movadon. Tamen ĉiujn TEJA-anojn minacas, kapdolorigas la plej urĝa, la plej grava problemo financa por transloki oficejon. Kaj ne nur en la flanko disvastigi nian lingvon inter gejunuloj, kreskigi, eduki komencantojn, organize, sed ankaŭ multaj TEJA-anoj partoprenas en la flanko labori per esperanto. Ili nun kunlabore tradukas novelaron "Horlogisto de Djen Bjen Fu" (elektitaj vjetnamaj noveloj de la periodo 1945--1964, eld. Fremdlingva Eldonejo, Hanojo-1971, 413p. ¥800 havebla ĉe JPEA) en la japanan.

En la alia ĉambro EVA havis kunsidon. Ĉeestis s-ino Isobe k f-ino Aihara el Jokohama. S-ino Isobe diriĝis al mi transdonisian'elkoran saluton al d-ro Yamaga.

Sufiĉe enspirinte la gajan atmosferon vigle junecplenan de E-Domo, mi, en la vagonaro, remaĉe pensis, ĉu ankaŭ ni en Sapporo ne eblas havi tian E-Domon, almenaŭ E-Ĉambron.....

(fino)

```
#####
#
# CE LA NOVJARO 1972, LA JARO DE RATO--- A
#
# Jenan poemeton donis al mi sur sia novjara karto mia' A
# malnova kamarado kaj gvidanto pri Esp., S-ro IĈIHARA A
# Umeki en Fukuoka. (A.Noŝida) A
#
# Ratoj kuraĉas, A
# Homoj klaĉas. A
# Ratoj mordas, A
# Homoj murdas. A
# Ho, for, for, for! A
# Ratoj kompätindaj malaperas, A
# Homoj malicaj foren pelas. A
# Mi do vivas fuĝe en angul' de l' mondo. A
#####
```


" Kappa reu reu kappa "

(kapo plata haltu, haltu!)

rakontita de luro

Kappa reu reu kappa.

Unu tagon, naĝante ludante laŭ flu',
trovis min atingi sub la lok',
ĉerpejo Samajunkur-a.

Tien venis bela dieca junulin', plijuna fratin' de Samajunkur,
tenis tinon en unu man' k. garb' da tifaĵoj en la alia.

Al ŝi diris mi ĉe la bord', elegante kapon,

" Havas patron? "

" Havas patrinon? ".

Surprizita la junulin' ĉirkaŭrigardis.

Baldaŭ rimarkis min, tuj kun kolerita mien',
aldiris min,

" Ho! malsatinda via plata kapo! malbona via plata kapo!
mi malestimita! venu denteguloj venu! ".

Montrante l' dentegojn,

maletaj hundoj alkuris min.

Surprizita mi subakvigis,
kaj laŭflue foriris.

Sekvante trovis min eligi kapon,
sub ĉerpejo Okikirmui-a.

Tien venis bela dieca junulin', plijuna fratin' de Okikirmui,
tenis tinon en unu man' k. garb' da tifaĵoj en la alia.

Al ŝi diris mi,

" Havas patron? "

" Havas patrinon? ".

Surprizita la junulin' ĉirkaŭrigardis.

Baldaŭ rimarkis min, tuj kun kolerita mien',
aldiris min,

" Ho! malsatinda via plata kapo! malbona via plata kapo!
mi malestimita! venu denteguloj venu! ".

Maletaj hundoj alkuris min.
 Samkiel antaŭa afero!
 Ridigita mi min subakvis al la fund'.
 Mi foriru, ja! kontraŭ mia atend',
 la hundoj sin ĵetis sur min funden en la riveret',
 montrante l' dentegojn,
 kaj min eltiris la degeton.
 Mia kapo mia korpo ambaŭ mordita ŝirita.
 Hxi Fine mi falis en malklarig'.
 Ha! rekonsciis min.
 Sidanta inter unu orel' k. la alia orel' de ega lutro,
 troviĝis mi.
 Kial mi ricevis la senindan mortiton de hundoj Okikirmui-aj?
 Ĉar mi petolis diri malgraŭ scio, ke kaj Samajunkur kaj
 Okikirmui ne havis siajn gepatrojn.
 Do, lutroj! Devu ne petoli post nun,
 rakontis la lutro.

Rimarko:

- (1) Estas pli bone iom-trempigi tifafoliojn en akvon, kiam oni ordinare trikas maton post sekigo de la folioj. Do, la junulinoj venis al siaj cerpejoj tenante garbo da tifaŭoj en siaj manoj.
 - (2) Oni tre malsatas paroli pri sia mortinta parenco k. patro. Estas ankaŭ malpermesita diri sekretojn de alia persono. Do, la junulinoj koleris la diron de la lutro.
 - (3) Dentegulo signifas hundo. Montbestoj timas la dentegon en casado.
- antaŭ li.

Tradukis K. SEKIO

" Tonupeka ranran "

(Ho, pluvas ankaŭ larvo!)

rakontita de marĉkonkulo

Tonupeka ranran.

Pro forta seka veter',
tute sekvigis nia loĝeja ter'.

Sur tro mortema kondiĉ', ĉiumomente ni metis nin.

Daŭrigis plori kriu,

" Iu ajn volu doni akvon, volu helpi nin,
akvon, akvon! "

Nu, de transa marbord' tien ĉi venis unu junulin',
tenis korbom sur l' dorso.

Ni daŭrigis plori. Preterpase nin,

ŝi rimarkis nin kaj dirante,

" Strangaj konkul', malbonaj konkul',
pro kio tristaj kaj bruegas? "

nin piedpremis, piedbatis, dispremis l' konkojn.

Tuj forlasis ŝi al transa mont'.

Ni daŭrigis plori kriu,

" Aj, dolora! suferiga! akvon, akvon! "

Nu, de transa marbord' venis la alia junulin',
tenis korbom sur l' dorso.

Ni kriis plori,

" Iu ajn volu doni akvon, volu helpi nin,
aj, dolora, suferiga, akvon, akvon! "

Do, apudvene nin kun dieca eleganta sintenad',
ŝi rimarkis nin kaj dirante,

" Kia kompatinda!

Ĉar sekvigas l' terlitoj konkulaĵ pro la varmeg',

eble vi soifas akvon, ĉu?

Kio okazis? Al mi ŝajnas.....,

ke iu piedpremis vin. "

Ĉiujn el ni kolektis en folion de petasit'.

Kaj ŝi enmetis l' konkulojn en klara laget'.

Ni ĉiuj, dank' al la pura akv' malvarma,
plene regajnis miajn vivecojn.

Nu, denove mi esploru l' karakterojn de l' da junulinoj.
Malsatinda malbona ino, unuavene piedpremis nin,
estis plijuna fratino Samajunkur-a.

Juna elegantino, kompatis nin helpis nin,
estis plijuna fratino Okikirmui-a.

Milikampon de malsatinda fratino Samajunkur-a,
velsekigis mi.

Milikampon de ŝatinda fratino Okikirmui-a,
maturigis mi.

Okikirmui-a fratino monto da milioj rikoltis en la jar'.
Per l' konkulo ŝi desiris milispikojn tuj post kompren',
ke kaŭzis riĉan rikolton la helpado por ni.

Virinoj de la homoj, post tiam, kutime uzis la konkulojn
ĉiujare por desiri milispikojn,

rakontis unu marĉkonkulo.

Rimarko

Marĉkonkulo signifas perlosto. Aĉu-virino kutime
desiris milispikojn per la konkulo.

Tradukis K. SEKIO

Sampaĵa terke

Trans du kaj tri valoj mi saltis kaj saltis.

Ludante mi iris al monto laŭ piedsigno de mia pli aĝa frato.

Ĉiutage mi iris laŭ mia frato.

Tie homoj metas kaptilon kaj mia frato detruas ĝin.

Mi interesiĝas ĉiufoje.

Iun tagon mi iris al la monto, kaj ne atendite troviĝis, ke mia frato estis enkaptita kaj ploradis.

Surprenite mi alsaltis al apud mia frato.

Li iris al mi "Vi de nun tuj kuregu al la vilaĝo kaj livoku laŭ-
tvoĉo: ho - hoj! la frato enkaptita!"

Aŭskultante la ordonon, mi respondis "Jes, jes"

Trans du kaj tri valoj mi saltis kaj saltis, aŭ ludante mi atingis la vilaĝon.

Tie mi preskaŭ ekmemoris, ke mia frato ordonis lin.

Mi volis laŭte ekrii, tamen mi tute forĝesis la enhavon de la ordono.

Mi tie haltis tamen vane povis rememori ĝin.

Ankoraŭfoje trans du kaj tri valoj mi saltis kaj saltis.

Mi reiris al apud la frato.

Sed ve! neniu estis tie.

Nur saĝo de mia frato videbla ĉirkaŭe.

Ketka uoi uoi ketka, ketka uoi ketka.

Denove ĉiutage mi iris al la monto kaj detruis la kaptilon, kiun homoj metis tie.

Mi interesiĝis ĉiufoje.

Iun tagon mi vidis unu malgrandan kaptilon el artaĵio krom la kutima tipo.

Mi ektuŝis ĝin, kiun mi ne povis kompreni.

Tiam kiam mi volis forkuri, mi jam estis nevole enkaptita.

Mi tordis min vane por forkuri kaj ploraĉis.

Io alsaltis apud mi. Tio estis mia pli juna frato.

Kun ĉojo mi ordonis al li, ke li tuj iru al la vilaĝo kaj sciigu al niaj vilaĝanoj pri mia akcidento.

Tamen mi devis vane atendi.

Kiam mi estis ploranta, subite aperis unu figure de homo.

Tiu estis bela junulo kiel la Dio.

Ridetante li premis min kaj alportis ien.

Tie oni troviĝas multe da trezoroj en granda domo.

La junulo ekbruligis la fajron kaj pendis grandan kuirpoton sur ĝi.

Li distranĉis mian korpon kune kun feloj en specojn per tranĉilo, kiu estis pendita sur muro.

Li plenigis la kardronon per viandoj kaj ekboiligis.

Iel por forkuri, mi vane provis, ĉar la junulo atentè rigardis
min sen malatento.

Se la viando estus boiligota, mi devus aĉe morti.

Finfine dum malatento de la junulo preskaŭ mi povis min transformi
al unu peco da viando kaj kunmiksita de vaporo elsaltis al la rando
de la potu kaj saltis malsupren kaj forkuris ekster la domon.
Florante kaj spiregante mi kuregis al mia doro kaj fine estis
trankvila.

Returne mi pensas, ke la junulo ne estis malgrava homo, sed Okikirmi-
ui t.e. la Dio tute forta.

Mi miskomprenis pri la kaptilo, ke ĝi estas metata de malgrava homo
kaj mi ĉiutage petolis.

Okikirmi, la Dio, volis puni min per malgranda kaptilo de herbo-
kaj kun komato li ne alpelis min, kiu forkuris.

En antikva tempo la lepero estis tiel granda tiel cervo:

Sed nun estas tute malgranda malsano unu peco da viando de Okikirmi,
ĉar mi faris tian petoladon.

"Miaj idoj, nepre ne petoladon."

Tiel admonis la ŝafisto de la lepero kaj finis sian vivon.

RAKONTO DE VŬLPO

" Haikunterke Haikositemturi "

Sur la kavo (terkavo) de la lando, sur la promonto de la Dio, mi sidiĝis.

Ekstere la maro estas kvieta kaj tute vasta.

Sur la maro oni troviĝas tri junaj ŝipanoj, nomataj Okikirimai, Ŝunramka kaj Samajunkur, por fiŝkapti.

Vidante ilin, mia malbona koro ekmoviĝis.

Mi ekuris de la kavo de la lando, de la promonto de la Dio, supren kaj malsupren, facilemove kaj delikate kaj blekis "paŭ, paŭ" kiel oni rompus la pezajn lignojn kaj alvokis la satanon de ventego, akre rigardante la fonton de la rivero.

Baldaŭ ekblovadis kirloventego kaj ĝi atingis al la maro. Ĝi poste la maro furioze ekondadis kaj ŝipo de la tri ŝipanoj pro tiu neatendita ŝanĝo de la vetero sur la maro rondturniĝis.

Granda ondo kiel monteto kovris sur la ŝipon.

La tri junuloj remis la ŝipon kun krio.

La malgranda ŝipo estas forblovata kiel defalita folio preskaŭ renversita.

Sed la spertaj homoj lerte direktas la ŝipon.

La malgranda ŝipo flitas sur la maro eĉ en ventego.

Vidante tion mia malbona koro denove ekmoviĝis.

Mi rondkuris facilmove kaj delikate kaj blekis "paŭ, paŭ", kiel oni rompus la lignojn kaj mi ekkuraĝigis la satanon de la ventego.

Dume fine dela mano de Samajunkur elŝpruces sango kaj li falis lace en la fundo de la ŝipo.

Mi kaŝe ridetis.

ankoraŭfoje mi rondkuris facilmove kaj delikate kaj blekis kiel oni rompus la lignojn kaj ekkuraĝigis la satanon de la ventego.

Sekve la du, Okikirimui kaj Ŝpunramka, kuraĝe remis la boato kuraĝigante unu la alian,

Tamen post kelke da tempo de la Ŝpunramka elŝprucas sango kaj li fine falis.

Vidante tion mi kaŝe ridetis.

Antaŭfoje mi rondkuris facilmove kaj delikate kaj blekis kiel oni rompus la lignon kaj kuraĝigis la satanon de la ventego.

Tamen nur Okikirimui estas forta kaj ŝajnas tute ne laciĝi, kaj remadas la boaton surmetante maldikan ĉemizon.

Dume la remilo disrompiĝis, Okikirimui alsaltis al la kadavro de Samajunkur kaj li deprenis la remilon kaj tuj denove ekremis.

Vidante tion mia malbona koro denove ekmoviĝis.

Mi rondkuris facilmove kaj delikate, kaj blekis kiel oni rompus la lignon kaj kuraĝigis la satanon de la ventego.

Dume la remilo de Samajunkur ankaŭ estis disrompita.

Okikirimui alsaltis al Ŝpunramka kaj deprenis la remilon kaj tuj denove ekremis.

Tamen finfine la lasta remilo ankaŭ estis disrompita de saveraj ondoj.

Tiam Okikirimui ekstaris en la ŝipo kaj akre rigardis kaj ektrovis min neatendite.

Li vidadis miajn okulojn sur la kavo de la lando, sur la promonto de la Dio.

Subite lia ĉarma vizaĝo ŝanĝiĝis kolerema kaj li elprenis malgrandan pafarkon kaj sagon el artemizio.

Vidante tion mi kaŝe ridetis.

Mi supozis, ke la homo ne estas minacata kaj kian utilon havus tia malgranda sago?

Mi rondkuris facilmove kaj delikate kaj blekis kiel oni rompus la lignon kaj admiris la satanon de la ventego.

En tiu ĉi momento la sago de Okikirimui alflugis kaj estis pikita alman nukon.

Tuj poste mi perdis mian tutan konscion.

La tempo pasis kaj mi rekonsciigis. Estas bela vetero.

La maro estas kvieta kaj vasta.

Nenie troviĝas la fiŝkaptiĝo de Okikirimui.

Mia tuta korpo, de la kapo ĝis la piedo, doloras same kiel oni forbruligita.

Mi tute ne sciis, ke la sago de la homo pafita tiel turmetas mian korpon.

Mi torde ploradis pro doloro kaj rondkuris supren kaj malsupren ĉe la kavo de la lando, ĉe la promonto de la Dio.

Kaj finfine mia konscio forpasis.

Kiam mi rekonsciigis, mi sidiĝis inter oreloj de la granda nigra vulpo.

Du tagojn poste Okikirimui alproksimiĝis al mi kiel la Dio, kaj li diris ridetante;

"La Dio de la nigra vulpo, kiu gardas la kavon de la lando, la promonton de la Dio, havas bonan koron kaj kiam li mortas, li estas bela."

Okikirimui ekprenis mian kapon kaj alportis min al sia domo.

Li metis mian oston de la supra mentono kiel la grando de sia necesejo kaj tiun de la malsupra mentono kiel la grando de la necesejo de sia edzino.

Mia korpo baldaŭ putriĝis en la tero.

Mi aĉe mortis en malbona odoro eĉ en la tago kaj en la nokto.

Mi ne estas malaltranco, sed pro mia malbona koro, mi devis el aĉe morti.

"Unaj vulpoj atentu, ke vi ne ekmovigu vian malbonan koron!"

Tiel rakontis la Dio de la vulpo.

Rano priantis sin mem "Tororo hanrok, hanrok!"

(Terkepi yaleyukar "Tororo hanrok, hanrok!")*

Tororo hanrok, hanrok!

Iun tagon mi saltante sur herbejo

dum ludado trovis min atingi

unu domon kaj ekiris al la pordo.

En la domo ĉe l'angulo de trezoroj*vidis mi

altan plankon. Sur la planko

unu juna viro ĉizis glavo-ingon kaplinante.

Kun intenco petoleti al li, sur la vojlo

mi sidante ekvivlegis, "Tororo hanrok, hanrok!"

Kiam tamen la junulo levis sian manon kun la galvo,

rimarkante min, ridetis li,

"Ĉu la via estas tiu kanto? Via ĝoja kanto?

Volas li ja aŭdi ĝin plu."

Goje kvakis mi, "Tororo hanrok, hanrok!"

Tiam la junulo diris,

"Ĉu la via estas tiu jukar? Ĉu sakehaŭ*via?

Pli proksime ĝin mi volas aŭdi."

Mi aŭdinté ĝin kun ĝojo

eksaltetis sur la randon de fajrejo apud l'enirejoj.

"Tororo hanrok, hanrok!" kvakis mi.

La junulo min demandis,

"Ĉu la via estas tiu jukar? Ĉu sakehaŭ via?

Pli proksime ĝin mi volas aŭdi."

(NOTO)

*l'sidejo per sanktulo: Vidu la planon de aina domo.

*Okikirmui: aŭ Okikurumi, die saĝa, varmkora kaj brava
heroo en ainaj rakontoj. Vidu la glosaron.

Nun ĝojego mi aŭdinte ĝin,
 min reĵetis sur angulon de l'sidejo por sanktulo:
 "Tororo hanrok, hanrok!" kvakis mi.
 Tiam ja subite ekstarigis la jurulo
 preni grandan lignon jam elblurigitan.
 Ĝin li ĵetis sur min.
 Tondris la sono ja sufoko sur mi.
 Perdis mi konscion pro la sono.
 Ekkonscii ĵunte mi trovis
 ranon kun la plenpufa ventro ĉe l'angulo de la rubejo,
 kaj min mem sidanta inter du brakoj de la rano.
 Rigardante ĉirkaŭaĵon, mi rimarkis,
 ke la domo, kiu mi supozis ordinara domo,
 estis la domo de Okikirmui, die forta viro.
 Senrimarki pri Okikirmui,
 ha, mi petoletis al li!
 Jam mi mortas tiel vane kaj malbone.
 Ranoj postoulaj!
 Vi neniam plu petolu al homoj!
 Tiel admonante mortis la plenpufa rano.

tradukis
 (IKEMOTO-Morio)

(NOTO)

- *terkepi (aina lingvo): "saltemulo", nome "rano".
- *yaieyukar (jaiejukar, aina lin.): kanto, kiu prikantas la kantanton mem.
- *Tororo hanrok, hanrok!: aina onomatopeo imitanta kvakon de rano.
- *l'angulo de trezoroj: vidu la planon de aina domo.
- *jukar (yukar, aina lin.): speco da ainaj epopeoj, kiu temas pri dio aŭ heroo. Vidu la glosaron.
- *sakehaĵ (sakehar, aina lin.): originale "sakea voĉo", nome "sake-festena kanto". Vidu la glosaron.
- *la randoj de fajrejo apud l'enirejo: vidu la planon de aina domo.

Atendataj Aliaj Tradukontoj

raporto el la oficejo de la Studa Grupo
por Esperantigi Jukarojn

Ĝis frua marto, ĉe ni kolektigis jenajn sep pecojn da traduko el la Diaj Jukaroj:-

1. Shirokanine ranran pishkan.....Hoŝida
2. Haikunterke, Haikoshitenturi....Jamaga
3. Sampaya terké.....Jamaga
4. Tororo hanrok, hanrok.....Ikenoto
5. Kappa reu reu kappa.....Sekio
6. Tonupe ka ranran.....Sekio
7. Tanota hurehure.....Hoŝida

Kaj krome s-ro Sekio intencas traduki la Antaŭparolon. Nur ses jukaroj restas en la enhavo. Almenaŭ eĉ nunaj membroj de la traduka grupo povos eltraduki la tutan enhavon. Estas tamen pli bone, ke la aliaj tradukontoj partoprenas nian grupon. Ni celu fortigi la kunlaboradon en Hokkajda distrikto de La Esperantujo, altigante nian kapablon per tiu ĉi tradukado!! Ĉiuj volantoj montru la volon laŭeble frue al ni!!

Ni ne nur traduku la Diajn Jukarojn, sed ankaŭ solvu la problemojn kune pri la tradukado. S-ro Sekio jam prezentis al ni liajn opiniojn:-

1. Kaptu la Karakterojn de la jukararo de Ĉiri Jukie:-

1. La tendenco de la enhavo
2. Diferencoj al la jukararoj kompilitaj de la aliaj homoj:-

1. Kion ĉi intencis per la jukararo?
2. Kion ĉi zorgis pri la traduko?
3. Kio estas la beleco en ĉia traduko?

2. Kiel traduku la titolojn de la jukaroj?
3. En kia stilo ni traduku ~~ĝin~~ la jukarojn?
4. Kiel ni paŭzu la liniojn, se ni tradukas ilin en versaĵo proza, libera?
5. Lenu la tipajn versaĵojn prozajn aŭ liberajn en Esperanto.
6. Kiel traktu la kutimajn esprimojn en Jukaroj, pri kiuj ankaŭ s-ro Hoŝida menciis? Kiel ilin esperantigu?
7. Laŭeble evitu uzi pronomojn (ĉefe la tria-personajn) kaj la vortojn, "de", "estas". Uzu ilin en la plej necesa minimumo.
8. Elektu la vortojn poeziajn.
9. Malbona estas enuiga esprimo.
10. Atentu la emfazitajn vortojn en ĉiuj linioj meti en la taŭga loko.
11. Tiuj, kiuj havas en si la lirikan mondon, tradukos lerté kaj bele.
12. Ĉiokaze en la tradukado ne forgesu delikatan zorgon.
13. Estas bone unuigi la stilon de la rimarko.
14. Aldonu la klarigon pri aĵaj aferoj.
15. Estas bone, ke nia stud-grupo mem havas la kontaktilon por rapidigi nian laboron, pli ol, ke ni uzas la organon, "Leontodo" por la celo.

Pri la propono de s-ro Sekio, ankaŭ Ikenoto preskaŭ same opinias; la opinioj supre menciitaj estas ŝajne la bazaj, fundamentaj zorg-punktoj en tradukado. Krome mi volas prezenti miajn opiniojn jene:-

1. Pri la speciala kontaktilo de nia stud-grupo, ankaŭ ni unue intencis disdoni ĉin en la kopia formo, tamen nun ni uzu la Leontodon kiel nian kontaktilon, almenaŭ dum iom da tempo, por ke laŭeble pli multaj tradukontoj sciu pri nia traduka movado! Ni ne bezonos tiel rapidi en la tradukado. Bezonos sufiĉe da tempo por tradukado en okupitaj tagoj, en kiuj tamen ni faru ion taŭgan al Hoktajdaj Esp.-istoj.
2. Traduki la titolojn ĉiuj tradukintoj jam faris divers-maniere; ni devos unuigi aŭ konkordigi la traduk-manieron. Nia opinio estas, ke estimante la sencon de la aina vorto, "yaieyukar", ni uzu en la titolo la frazon, "... prikantis sin mem" kune kun la "sakehe", tipiga rekantaĵo al ĉiuj jukaroj. Ni povas trovi bonan esprimon en PIV.:-

prikanti (tr.): Gloro aŭ ple rememorigi per kanto.

la rozoj pensis, ke la najtingalo prikantas sin mem. Al mi ŝajnas, ke tiu ĉi ekzemplo de Zamenhof estas sufiĉe bona esprimo por "yaieyukar".

3. Ankaŭ la rimarkon ni devos unuigi en la stilo. Antaŭ ĉio ĉiuj tradukintoj aldonu almenaŭ la piednotojn al siaj tradukaĵoj, kaj krome ni kune faru la grosaron.
4. Por la regontojn komprenigi pri la proprajn substantivojn kaj aĵojn propran vivmanieron ktp., estos necese aldoni la prezentaĵojn pri aĵoj aferoj. Nun mi preparas manuskripton pri la plano de aina domo por la sekvonta numero de la Leontodo.

5. Estas nia problemo, kiel ni traduku la ritman karakteron de jukaro. Se ni intencas preni mekanike la jukaran ritmon mem en la traduko, ni povus uzi la muzikmotojn en "Ainu Dentō Ongaku", kompilita de NHK. Sed almi ŝajnas, ke estas pli bone traduki en la plej Esperanteca ritmo. **Tiel pensante** mi prenis trokeon en nia traduko; nia lingvo estas ritme konata kiel "trokea lingvo", ĉu ne? Tamen mi intence ne ŝanĝis la originalan parton de "sakehe" ankau en ritmo. Por pripensi kiel oni entradukis la ritmon, mi iom prezentas la modelojn jene:-

Unue la versaĵon de W. Blake

THE TYGER

$\begin{array}{cccc} \diagup & \diagdown & \diagup & \diagdown \\ \times & \times & \times & \times \\ \text{Tyger! Tyger! burning bright} \\ \diagup & \diagdown & \diagup & \diagdown \\ \times & \times & \times & \times \\ \text{In the forests of the night,} \\ \diagup & \diagdown & \diagup & \diagdown \\ \times & \times & \times & \times \\ \text{What immortal hand or eye} \\ \diagup & \diagdown & \diagup & \diagdown \\ \times & \times & \times & \times \\ \text{Could frame thy fearful} \\ & & \diagup & \diagdown \\ & & \times & \times \\ & & \text{symmetry?} \end{array}$

*la skando: ĉefe **trokea**, kaj parte jamba kvarmetro

LA TIGRO

$\begin{array}{cccc} \diagup & \diagdown & \diagup & \diagdown \\ \times & \times & \times & \times \\ \text{Tigro, tigro, brile brula} \\ \diagup & \diagdown & \diagup & \diagdown \\ \times & \times & \times & \times \\ \text{En arbaro nokt-obskura} \\ \diagup & \diagdown & \diagup & \diagdown \\ \times & \times & \times & \times \\ \text{Forgis kia man! eterna} \\ \diagup & \diagdown & \diagup & \diagdown \\ \times & \times & \times & \times \\ \text{Vin je simetri! konsterna?} \end{array}$

(tradukis W. Auld)

*la skando: ĉefe trokea, tamen parte jamba kvarmetro en la sekvanta stanco

Due tiun de T. Gray

ELEGY WRITTEN IN A COUNTRY CHURCHYARD

The Curfew tolls the knell of parting day,
 The lowing herd wind slowly o'er the lea,
 The ploughman homeward plods his weary way,
 And leaves the world to darkness and to me.

*la skando: jamba kvinmetro

ELMIO VILANTA EN LAŬTARA TOMBULO

Taghor-ton signas sonorila tristo,
de l'kampoj, muĝaj brutoj lante pasas,
trenpaŝas lace hejmen la plugisto,
kaj al mi kaj al nokt' la mondon lasas.

(trad. W.Auld)

*la skando: jamba kvinmetro

Laŭ ĉi-supera tradukaĵo Auld entradukis enkaŭ la ritmon serioze kaj severe al la originalo. Se ni iel ajn tradukas, estas necesa la regula ritmo kune kun la literatura valoro.

ALVOKO

al tradukontoj:

Sendu la tradukaĵon kaj opiniojn, aŭ almenaŭ montru la volon, kiun parton vi deziras traduki, al la oficejo de la Studa Grupo por Esperantigi Jukarojn.

al la partoprenintoj de tiu ĉi movado:

Restigu novan tradukparton de la teksto por la freŝaj tradukontoj, se eble. Polurante sian tradukaĵon, penu fari la rimarkojn. La manuskriptojn, ankaŭ pri la plibonigitaj tradukaĵoj, sendu al la oficejo.

→ 池本氏転勤かつ変更

053 苫小牧市白金1-4, 8-15

星田 淳 氏宛

Adreso de la oficejo kaj la zorganto:

066 千歳市本町4-7-6 池本盛雄氏宛

ユークラ・インテリゲンチヤ研究会

RAKONTO DE DIO SINDUS PRI SĜ MEM

(Kotan-kor-kanuj jajejekar)

Jukaro (poemo aina)

Prove tradukis A. HOŜIDA

- 1 "Ĉirkaŭ mi falu arĝentaj gutoj,
ĉirkaŭ mi falu oraj gutoj."
Mi laŭiris kantante,
laŭ la direkto de la fluo.
- 5 Flugante super homa vilaĝo
rigardis mi malsupren kaj trovis,
ke riĉigis iamaj malriĉuloj,
dua malriĉigis iamaj riĉuloj.
Marborde ludas knaboj
- 10 kun saĝetoj
kaj pafarketoj,
malgrandaj, ludilaj.
"Ĉirkaŭ mi falu arĝentaj gutoj,
ĉirkaŭ mi falu oraj gutoj."
- 15 Kiam mi tion kantante
flugis super la knaboj,
ili kriis malsuper mi
kurante kune, multope,
"Bela birdo,
- 20 dia birdet',
nu, ni rapidu
kapti ĝin.
Bravulo vera estu tiu,
kiu ĝin trafos per sia saĝo,
- 25 kaj ĝin kaptos por la unua,
la birdeton de la dio.
Hetmano vera estu tiu!" Kriante tiel
La filoj de nunaj riĉuloj,
do, entaŭaj malriĉuloj,
- 30 pafis min
per pafarketoj oraj
kaj saĝetoj oraj,
Sed mi lasis la saĝetojn
- 35 flugi sub mi
aŭ super mi.

- 37 kaj tiam
inter ili troviĝis
unu knabo mizeroscjna,
- 40 kun nur simpla pafarketo
kaj sagetoj nur lignaj.
Mi vidis, ke
li estas
el malriĉa familio,
- 45 laŭ la atesto de l' vestoj.
Tamen l' okuloj sugestis,
ke la nepoj li estas,
de nobluloj iamaj.
Ja, li ŝajnis kvazaŭ birdo
- 50 alispeca, sola en la grupo.
Ankaŭ li
celis nin
per simpla pafarketo
kaj simpla sageto.
- 55 Tiam la filoj de riĉuloj,
estintaj antaŭe malriĉuloj,
nokis kaj batis lin
mane kaj piede,
kriante
- 60 "Fi, ridinde arogas
la malriĉulid",
la birdeto, birdo dia
ricevi de ni ne volantas
eĉ la sagojn orajn!
- 65 kiujn ni al ĝi prezentas!
La simplan sagoĉon,
la putran lignaĉon,
ĉu la birdeto ricevos,
ĉu birdo dia ricevos,
- 70 kun precipa komplezo?"
Tamen tiam la knabo
de malriĉa familio
celadis nin, spite ĉion.
Vekis en mi simpatian
- 75 tiaj liaj kondutoj.
"Ĉirkaŭ mi falu arĝentaj gutoj,
ĉirkaŭ mi falu oraj gutoj."
Kantante tion
mi ŝvebis ronde
- 80 lante en la vasta ĉielo. —42—

- 81 La filo de malriĉulo
celadis min,
foren metante unu piedon
kaj la alian ĉe la korpo,
85 mordante sian malsupran lipon
firme inter la dentoj.
Fine li pafis
kaj mi vidis
la sageton fluganta,
90 bele treme briletanta.
Mi etendis la manon
kaj kaptis la sageton.
Kun ĝi flirte mi falis,
dum la aero forte siblis
95 fajfe ĉe miaj oreloj.
Tiam ĉiuj santepe
ekkuris la knaboj,
polvigante per la piedoj
impete al mi, por min kapti.
100 Ĝuste kiam mi falis surteren,
la malriĉa knabo por la unua
atingis min kaj kaptis min.
Tiam
la filoj de iamaj malriĉuloj,
105 do, nunaj riĉuloj,
kure atingis lin,
kune puŝis lin,
ope frapis lin,
kun dudek mokoĵ,
110 tridek mokoĵ.
"Malaminda knabo,
malriĉulid',
kuragas fari
kion ni volis!"
115 Kontraŭ la perforto
la malriĉa knab'
defendis min per sia korpo,
kovris min firme sub sia ventro.
Post longa baraktado li,
120 apenaŭ sin liberiginte
de la knabaĉoj,
kun klara paŝbruo ekkuris.
La filoj de iamaj malriĉuloj,
kiuj nun estas riĉuloj,

- 125 kontraŭ li ĵetadis
ŝtonojn kaj lignopecojn.
Spite tion kuratingis
li al malgranda sia domo,
kun polvo forta ĉe l' piedoj.
- 130 Li metis min en la domon
tra la honora fenestro
kaj aldonis klarigon
pri la afero okazinta.
De la interno de la domo
- 135 venis gesinjoroj maljunaj
kun manoj sur la brovoj.
Kvankam malriĉas la ŝajno,
ĉe ili troviĝas la eco
de gesinjoroj noblulaj.
- 140 Surprizigis vidinte min,
fleksante ili la koksojn.
Metante bonorde la zonon
adoris min la maljunulo,
"Dio strigo,
- 145 dio peza,
ne sufiĉus mia danko kaj bonvenigo
pro via vizit'.al nia domaĉo, kompleza.
Kvankam oni enkalkulis
min en riĉulojn iam,
- 150 nun mi vivas tiel mizere.
Do mi timas ofendi vin,
dion defendanton de vilaĝo,
ĉar mi povra gastigas vin
en tia mizera ĉi domaĉo.
- 155 Loĝu ĉe ni ĉi nokte, dio peza,
ĉar jam vesperiĝas,
morgaŭ ni sendos vin, dio peza,
almenaŭ kun ornamo ligna."
- Ripetante tion
- 160 li adoris min
fojojn dudek aŭ tridek,
kaj la sinjorino maljuna
metis maton floran
sub la fenestro de honora loko
- 165 por mia sido
kiel gasto.
Tuj ili dormiĝis tiam,
aŭdiĝis ronkado jam.
Mi sidis silente
- 170 inter la oreloj
de miaj surteraj ŝeloj.

172 Ekstaris mi meznokte
 kaj komencis iri dancante
 kaj mallaŭte kantante,
 175 "Ĉirkaŭ mi falu argentaj gutoj,
 ĉirkaŭ mi falu oraj gutoj."
 Sonoris bele kiam mi saltis
 al la sidejo maldekstra,
 al la sidejo dekstra,
 180 en malgranda la domo.
 Kaj je miaj flugilbatoj
 falis belaj trezoroj,
 trezoroj de la dioj,
 kun tre belaj sonoj
 185 kvazaŭ metalaj batoj.
 Dum momento mi plenigis
 tiun malgrandan domon
 per belegaj trezoroj,
 trezoroj de la dioj.
 190 "Ĉirkaŭ mi falu argentaj gutoj,
 ĉirkaŭ mi falu oraj gutoj."
 kantante tiel mi ŝanĝis
 tiun domon malgrandan
 dum momento
 195 al domo ora,
 domo granda.
 En ĝi mi metis
 pompan trezorejon,
 belan vestaron el silko,
 200 por ornami rapide la ĉambron.
 Multe pli pompa ol riĉula domo
 ĉi tiun domegon mi ornamis.
 Post tio mi sidis
 tutsame kiel antaŭe
 205 inter la oreloj
 de miaj surteraj ŝeloj.
 Per sono mi sciigis
 al la familianoj, ke --
 hodiaŭ vin mi vizitis
 210 kaj ĉe vi nun restas,
 kvankam mi, dio birda,
 ne malaltranga ja estas,
 kaj mi donis favoron
 ricigi vian familion,

- 215 ĉar mi vidis
 kaj kompatis vin,
 rigardinte vin, kiu estis
 antaŭe riĉa familio,
 tamen nun malriĉigis
- 220 pro ia malbona hazardo,
 kiun nun mokas, malicas
 nunaj riĉuloj
 antaŭe malriĉaj. --
- Iom poste
- 225 tagigis,
 la domanoj ellitigis
 ĉiuj samtempe kaj venis.
 Kiam ili rigardis ĉirkaŭon
 mane frotante la okulojn,
- 230 ĉiuj planken falis surprizite.
 Ploris la maljunulino
 voĉe pro emociigo.
 De l' okuloj de l' maljunulo
 falis larmoj en gutoj.
- 235 Baldaŭ li ekstaris,
 al mi venis -
 min riverenci
 da fojoj dekojn
 kaj centojn.
- 240 Li min riverencis
 kun la vortoj,
 "Kvankam mi pensis,
 ke mi havis
 nuran songon, dormeton,
- 245 ha, kia favoro
 efektive min trafis!
 Bonvolis vi, viziti min,
 tiel malriĉan
 kaj mizeran.
- 250 Eĉ nur pro tio elkore
 dankas mi vin, ho dio
 vilaĝogarda,
 dio peza,
 pro la malfeliĉo nia
- 255 vi kompatis nin
 kaj donacis
 la plej pezan el viaj
 ĉiuj favoroj
 ja al ni! "

Rimarko pri la traduko de Jukaro

A. Hosida

Ĉi teksto RAKONTO DE DIO STRIGO PRI SI MEM apartenas al la genro de dia jukaro (kamuj jukar), temanta pri la spertoj de dioj animalaj, en la formo de rakonto pri si mem. Mi prenis kiel tekston JUUKARA KANŜOO de D-ro ĈIRI Maŝiho, aindevena filologo en Hokkajda Universitato, mortinta antaŭ jaroj.

Japanaj jukaristoj kutimas traduki laŭvorte de aina teksto. Ĉar la vortordo en ambaŭ lingvoj aina kaj japana preskaŭ samas, tia laŭvorta traduko estas ne nur ebla, sed ankaŭ utila por redoni kaj rekonstrui la spiritan mondon de aina tradicio en japanlingva esprimo. Tamen ĉe mia provo traduki ĝin esperanten, tia laŭvorta traduko ne estas ebla pro malsama vortordo en lingvoj aina kaj esp-a.

Do linio-al-linia respondo kiel ĉe ain-japana traduko ne okazas en ĉi kazo. Mi klopodis, do, arangi la tradukon en fraz-al-fraza respondo kaj ke la nombro de linioj koincidu.

〈要約〉このユーカラは動物神が自らの体験を物語るもので、カムイユーカラといわれるものに属する。テキストとしては知里真志保・小田邦雄共著の「ユーカラ鑑賞」を使った。

ユーカラを訳する場合、アイヌ語・日本語対訳で、各行対応のかたちで発表されるのが普通だが、これはアイヌ語・日本語の語順がほぼ同じだから出来ることで、エスペラント訳の場合にはムリになる。アイヌ・日本語の対訳方式では、アイヌの発想が、そのまゝ、日本語にうつしやうい利便があるが、ESP.ではできないので、文対文の対応をとるようになり、行数を文の区切りで合わせるように努力してみた。

〈付記〉

このユーカラの原文は最近再版された弘南堂発行の「アイヌ神謡集」(知里幸徳編)にあるので、疑問の点はこのアイヌ語原文を参照し、苫小牧東中学校の扇谷先生に教えて

いただいた。先生の意見では、発表するならば、やはり原文、
訳文対応のかたちにしたと、学問的価値がなくなるとの
事、今後考慮したい。

このユーカラは全文433行で訳は終わっているが、この
号には前半のみ紹介する。もうひとつ「上の砂赤い赤い」
の104行も、ほぼ終わっているので、ひきつづき清書のうえに
紹介したい。ついでながら、この知里訳は、実際にとらえ
る時の息づきで行を分ける、今普通に行われているもの
とちがう。もし、普通の形にすると、行の数がはるかに
多くなる。日本語にする場合は行～行の対応ができて
ないので、Esp.にする場合は厄介なので、知里(真志保)の
この方式とした。知里幸恵訳も息づき行分けではない
が、真志保訳とちがう所も多い。どこの形で訳するが
いかり、今後討議したい。猫「アイヌ神謡集」に
あるアイヌ語原文には、かなり誤植も多いようだ。

(星田)

編集ノート

★ 池本盛雄さん、浜松へ転勤！ ユーカラの翻訳も
軌道に乗りつつある時もあり、北海道にとっては大損害！
TEROのみが20もがんばってくれよう。

★ 和文タイプ購入の集金にご協力を！ それから E-Domo (Cambria) を
私帳につくる話も実現させたいのです。

★ L. No. 46 は 50頁を越えてしまいました。タイプで原稿を打つときは
必ず 20×14cm くらいにおさめてくれよう。赤田さんの Vorbaro は
編集の都合上、順序が少々いれかわっています、ごカンパンを。

★ 改訂ヤンゴウメは 5月 20日。

★ 巻ロンドの例会についての報告などもぜひお聞かせに。 Ischijima
membroy からのたよりを歓迎！

Japano-Esperanta Vortaro por mi

HAMADA-Kunisada.

Mi kolektis vortojn el rekompilita Nova Vortaro Esperanto-Japano (JEl) kaj reordigis kiel J-E vortaro. Nun nur parto A estas aranĝita.

A

- a A, a (Esp. 字母第1字) ア(A
aの名称). ~a° (形容詞語尾)
あ / (失望・驚き) ah / あ / (驚き
不審). oh / あつ / (尾聲) oj° /
曲を示す(頭). sub.
- â ああ / (驚き, 苦痛, 皮肉) aha /
(驚き, 苦痛 嘆き) aj / (感動)
ha / (驚き, 喜び, 嘆き, 悲しみ)
ho (悲哀, 苦痛, 残念) ve / ああ
大変だ Dio mia / Ho Dio /
- アバック(敷・建) abako
- abaku あばく malkovri,
malkaŝi, elterigi,
malsekretigi.
- abara あばら(料) ripaĵo
- abraja あばらや domaĉo,
あばら家 kabano.
- abata あばた varidmarko
- abazure あばずれ(阿婆様)
fivirino
- アベマリア(祈り)(キ) avemario
- アベニュー(通り) avenuo' —49—
- p. f. superŝuti, あびせかけ
られる alŝutiĝi
- アビシニア Abisenio, ~ujo (=
Etiopio, ~ujo), ~人 abiseno
- アビトゥリエント(資格)
abituriento
- アボガド(果) avogado,
(植) ~arbo
- abu (虫) tabano
- abumi あぶみ(馬) piedingo,
abumikocu あぶみ骨(解) piedingo
stapedo*
- abura 油(化) oleo := petroro
~を塗る; 注ぐ ~i.
油状の ~ida
油比重計 ~ometro,
油含有の ~odona
油を産する ~odona
油穴(機) ~truo, 油入れ ~ujo
油タンク ~ujo 油をさす ~umi
油さし(機) ~umilo.

アベスタ(経典)(⁶) Avesto	油画(juga) olepentraĵo.
abi あび(鳥) kolimbo	あぶらこさ graseca.
アビーソ(船)(ス) aviso ^s	あぶらのない malgrasa
abiseru あびせる superverŝi	aburagiri アブラギリ(鱧)
	aleŭrito
aburamuŝi あぶらむし(虫)	~をおこしている ~i
brapto	acurjoku 圧力 premo.
aburanaka アブラナ科(鱧)	~ポンプ(機) prempumpilo
kruciferoj ^s	アツチカ(地方)(ギ) Atiko
aburaniku 脂肉(料) grasaĵo	~の a~a ^s
アブリコ(あんず)(果) abrikoto	アーチ(形)(建) arko,
~(鱧) abrikotarbo	~形の物 ~aĵo
aburu あぶる rosti	アーチポールト 背面(建)
アブサン(酒) absintaĵo	ekstradoso
~中薬病) absintismo	アチドーシス(病) acidozo
アブストラクト(作品)(美) abstrakta	アーチフォニーム(声) arkifonemo
アプト式の(鉄) abta	aĉikoĉi e あちこちへ
acubazakura アツバザクラ(鱧)	tien kaj reen
aŭrikulo	aĉira あちらへ for.
acubjôŝi de sêhon suru	あちらの人 transulo,
厚表紙で製本する kartoni,	あちらの方の fora
~製本する bindi	アダジェット(薬) adaĝeto
acuen 圧延する(機) laminati ^s ,	アダジオ(曲)(薬) adaĝo ^s
~ローラ ~ilo	アダム(男子名);(聖) Adamo
acugami 厚紙 kartono	ada o ucu (父の)あだを討つ
acui 熱い p.f. varma	vengi patron
暑い p.f. varma	adana あだな mok nomo

acukamaŝii あつかましい
dikhaŭta, impertinenta,
mlamodesta, pretendema,
tropetema

acukamaŝikumo あつかましくも
～する aŭdaci^s

acukigai あつきがい(貝)
mureko

acuku naru 熱くなる varmigi
曇くなる varmigi

acuraeru あつらえる mendi

acureki あつれき konflikto

aegi あえぎ stertoro

aegu あえぐ stertori, anhelis

aen 亜鉛 zinki, ~メッキする. ~

をきせる ~i, ~メッキをする

~メッキをする galvanizi^s

~メッキの galvanizita

~華 zinkoblanko

~版(印) galvanaĵo, zinko-
grafio, zinkogravuro

aensosanen 亜塩素酸塩 klorito

aete suru あえてする kuragi

アオリズム(文学) aforismo

アガ(将軍・大官)(ト) agao

アガマ(勳) agamo

adappoi onna あだつばい女

f. hurio

アダブタ(機) adaptilo

アダスイスモ(接尾辞だけによる押韻)

(Esp.) adasismo^s

adegi あで着 ornamvestoj

アデニン(化) adenino

アデノジン(化) adenzino^s

アドービ(れんが)(壁) adobo^s

アドミタンス(電) adomitanco^s

アドレナリン(化) adrenalino^s

アドリア海 Adriatiko

アグチネーション(化) aglutino

アヘン(化) opio, ~剤 ~aĵo

~中毒(病) ~ismo

~チンキ(薬) laŭdano^s

ahiru あひる(鳥) anaso

~肉(料) ~aĵo

ahôdori あほうどり(鳥)

albatroso^s

ahô no あほうの idiota

アフガニスタン Afganio, ~ujo,

~lando, ~人 afgano

アフラマズダ(女神) Ahura-Mazdo

ahure あふれる!

superakvi, superflua

~ばかりの plenplena

agameru あがめる apoteozî.
 adori
 aganainuşi あがない主(キ)
 Elaĉetinto
 agnau あがなう(罪を) elaĉeti.
 senpekigi
 アガパンツス(植) agapanto
 agaru 上がる levîgi, suriri
 のほつていく supreniri
 ageru あげる(生理) regurgiti
 アギ剤(薬) asafétido^s
 ago あご(解) mentono.
 預 makzelo,
 ~ひげ barbo, mentonbarbo
 ~ひも mentonbendo
 ~ ひげある人 barbulo
 ~の突き出た(人類) prognata
 アゴラ(広場)(ギ) agoro
 アグチ(動) agutio
 アグラオベ(虫) aglaopo
 aika 哀歌 lamento, (詩) elegio
 ~体の, 哀調の elegia
 ~作者, ~の詩人 elegiisto
 aikô suru 愛好する(芸術などを)
 dileti, f. frandi
 aikokuša 愛国者 patrioto;
 愛国主義 ~ismo
 アイロノゲン(化) ikonogeno
 aikôshi 咬い口(毒) abutmento^s
 aiami ai あいまいに dube —52— mašo
 アフリカ Afriko. ~人 afrikano
 ~ありくい(動) orikteropodo
 アフリカソデル人 afrikandero*
 アフリカーンス語(語) afrikanso*
 アフロディーテー(ギ神) Afrodito
 ahuta あふた(病) afto
 ai あい(化) indigo, anilaĵo
 愛(無私の) f. agapo, 愛 amo
 アイポリブラック eburnigro
 aibu suru 愛ぶする karesi
 ai cujiru 相遭じる
 interkomuniki
 ~等しい egala, (物) ~aĵo
 ~対して kontraŭ
 ~変らず~である resti
 aiĉaku 愛着 aldoniteco
 korinklino
 aidokuŝo 愛読書 f. breviero^s
 aifin 愛人(女) amatino
 aiŝcheki 愛書癖 libromanio
 aiŝoka 愛書家 bibliofilo^s
 aita 飽いた f. laca
 アイターミナル(通) koŝo^s
 aitaŝugi 愛他主義 altruismo^s
 ~者 ~isto
 aite iru あいている vaki
 アーヤ(侍女, うば)(イン) ajo
 ajakoma 綾小間(あやこま)(織)

ai no toku 愛の徳(キ)
karitato
アインスタインウム(元素)(化)
ejnŝtejnio
アイヌ人 aino
アイオリア人(史) solo
airaŝisa 愛らしさを示す(尾)
~et~
airo あい路 difilejo,
f. botelkolo
アイロン gladilo
~台 gladkuseno,
~をかける(服) gladi
アイルランド Irlando
aisa あいさ(鳥) mergo^s
ai 愛の言行 amaĵo
愛する ami
aisacu あいさつ saluto
~する saluti
aisô 愛想 afablaĵo
~の悪い malafabla,
~良い komplezo
aisan 愛さん(キ) agapo
アイスランド Islando

ajamaĉi あやまち kulpo
~やすい pekema, pekiva
~を犯す kulpiĝo, (宗) peki
ajamari 誤り eraro,
誤らせる ~igi 誤りの misa
誤りを示す(頭) mis~,
誤つた malprava
誤つた発音をする misprononci
ajame あやめ(植) irido
ajamekazari あや目師 haĉo
~にする(建) haĉi
ajaorinuno あや織り布(織)
kepro, ~に織る ~i
アヤバナ(植) ajapano
aju あゆ(魚) plekogloso*
aĵi あじ(魚) trakuroso*
aĵi 味 gusto, ~のよい bongusta
~をつける gustigi
~わい楽しむ frandi
~わう gustumi
アジア Azio, ~人 a~ano
アジ化合物(化) azido
アジム(たねなしパン)(ユ) maco
アジピン酸 adipata acido

~塩 adipato*
ajisai あじさい(植) hidrangeo
(種)(植) hortensio
aĵisasi あじさし(鳥) ŝterno
アジュロール(化) adurolo

p. flumi
明るく澄んだ klara
akaŝimamenò 赤シマメノウ
sardio, sardonikso
akatecu アカテツ(植) sapoto

akaaŝiŝigi あかあししぎ(鳥) 1
 totano
 akabana アカバナ(植) epilobio^s
 akabarahikigaeru あかばらひ
 きがえる(動) bombinatoro
 アカデミー akademio
 ~会員 ~ano
 アガド人(史) akado
 akagana 赤銅(化) ŝakdo^{*}
 akago 赤子 lulinfano,
 vindinfano
 akai 赤い p.f.ruga, 赤色 ruĝo
 赤くなる p.f.ruĝigi
 アカイア人 akajo
 akaĵi 赤字(商) deficito
 akakedani あかけだに(虫)
 rikoltakaro
 akakabu アカカブ(植)
 ruĝa beto
 akamuŝibjō 赤虫病(病)
 trombidiozo
 アカンツス(植) akanto
 アカンサス(錫)(建) akantaĵo
 akaraiĉō あからいちょう(鳥)
 skota lagopodo
 akarasama あからさまの mal-
 implicita
 ~にいう malimplici
 akarui 明るい hela,
 akaumigame あかうみがめ(動)
 kareto
 akaza あかざ(植) kenopodio
 akazu あかずのろう forgeskelo
 akebi あけび(植) akebio
 akebono あけぼの p.f. aŭroro^s
 アークード(一区切り)(建)
 arkado, (全体) ~aro
 akenomjōĵo あけの明星
 Lucifero
 アケローン(川)(ギ神) Akerono
 akeru あげる(こじ) pikpioĉi
 (選路)をあける malobstrukci
 akesukena あけすけな
 senmetafora
 アーキポルト(建) arkivolto
 akigiri アキギリ(植) salvio
 akinokirinsō アキノキリンソウ
 (植) solidago
 akiraka ni 明らかに sendube
 akirame あきらめ rezigno
 あきらめる ~i, fordecidi,
 konsoligi, ~捨てる for
 アキレスけん akila tendeno
 アキレウス(ギ神) Akilo
 アキロン(ギ神) Akvilono
 akiru あきる enui,
 飽きるほどに ĝissate
 アークトレーブ(建) arkitravos^s

札幌にも エスペラントの家

ESPERANTO-DOMO

au -ĈAMBRO

または 部屋をくろう!

すべての札幌の同志のみならず! そして全国各地の献身的活動をしておられるエスペランティストのみならず!

東京青年エスペラント連合が、有志の努力により、活動の拠点として「エスペラントの家」を持つようになってから、東京における運動の展開には目を見はるものがあります。また KLES (関西学生エスペラント連盟) も昨年12月より独自の事務所を持ち、さらに北九州の同志にもその準備があると聞きます。

エスペラント運動を能率的に発展させ、多数の活動家を養成するためには、活動の定着した場が必要になってきます。とくに札幌のように100万都市、しかも公共福祉施設の乏しくてたぎっている大都市においては、安く借りられる例会場所はなかなか見つかりません。せいぜい、どこかの kafejo にでもたむろすることが多いのです。しかし、ここで1か月のコーヒー代を暮らすならば、そして、もし人数が10人のオーダーに達するとすれば、一部屋どこかのアパートでも借りることも決して不可能ではありません。

もし一部屋でもよいから、活動の定着した場所が確保できたとすれば、個人的ギセイの上になり立ちがちなエスペラント運動を、真に組織的活動に成長させることができるでしょう。連盟の事務局の機能がいよいよ充実したものと知り、また個人宅あるいは事務所の大きな空間を占めている連盟あるいは各ロンドの「黙居」も 既らせておかないで、十分に活用

をせらるでしょう。もちろん札幌を訪れる samideanoj の宿泊所にもなるでしょう。各ロビーあるいは grupo の例会場所となることはもちろんのことです。何よりも大きいのは、誰にでも開かれた 空 間 を 確 保 する こと に 対 し て、より多数の人が、日常活動に参加できらるであらうし、またその中からわたしたちの運動をになり次世代の活動家が育っていくことではないでしょうか。

こうした Domo あるいは Cambro をもつことは、単に札幌のみならず、北海道全体としての運動を大きく変えていくことになると思います。

そこで私たちは、次のような計画を札幌のみならず、全道の同志のみなさんに提起し、Esperanto 運動の拠点づくりが実現するよう、暖かい援助をこうもつてです。

記

1. 「エスパーントの家(部屋)維持会員を札幌はもとより、全道からつかり、「家」(部屋)維持の取组的基盤をつくる。(目標、月10,000円)
2. 「Eの家(部屋)」の維持会員費は、毎月1口500円とする。
3. 「Eの家(部屋)維持会員で、「家」の管理運営委員会を組織する。
4. 「Eの家」は、札幌市内で、交通の便のよいところの、(北大近辺 an 地下鉄沿線)
6畳2間 an 8畳1間のアパート等
を借りる。

ぜひあなたも札幌に Esp-Movado の 根 拠 地 を つ くる 旨 に 賛 同 な され、 「Eの家」維持会員になってくださるよう(1口でも、2口でも 1/2口でもけっこうです) お願いいたします。

1972. 3. 17

エスパーントの家(部屋)をつくる会

連絡先:

063 札幌市琴似新宮の森 811-4

留印青英寮内

沢谷雄一

Tel. (011) 611-1467

振替口座(小樽) 16388

発起人; 黒川恵美子, 沢谷雄一,

清水寛, 松岡耕二,

嶺正子.

賛同者; 児玉玄夫, 高橋要一,

木村善五治, 那須博文

Libroj naveblaj ĉe Librejo VERDA STELO

<緑星堂在庫図書>

1972-3. * ()内の数は在庫数を示す

VORTAROJ

- エス和辞典 ¥1,100 (1)
- 和エス辞典 ¥500 (6)
- 新選エス和辞典 ¥500 (1)
- 日蘭用語活用辞典 ¥250 (4)

260語以上の基本単語について用例とフレーズがある

Plena Vortaro de E. ¥1,600 (1)
中級以上の人の必携!

Slosilo (Angla-Esp.) ¥60 (4)
エスペラント辞 (Esp.-Japanu) ¥60 (10)

LEKONLIBROJ

- 新エス講座 vol.1 ¥350 (9)
- vol.2 ¥450 (2)
- vol.3 ¥350 (4)
- vol.4 ¥450 (2)

A Practical Course
マンが入門書 in Esp. ¥190 (1)

Teach Yourself ESPERANTO
英語からの入門書 ¥540 (1)

前置詞の用法 ¥160 (5)
解説と用例

Esperanto por Infano ¥180 (4)

初文エス語研究 ¥800 (2)
新刊

Ne tiel, sed ĉi tiel ¥450 (1)
エスペラントで文章を書く時の人間的忠告!

美しい文を思いつく例をあげて解説 ¥100 (1)

小坂 講習所書 ¥350 (4)

エスペラント文法入門 ¥420 (9)
国際文法の1冊から

エスペラント会話教室 ¥450 (1)
よく売れる新刊書

FACILAJ LEGAĴOJ K BILDILIBROJ

やさしいエスペラントの読み物 挿絵 ¥250 (4)

La Teksto Dua ¥80 (4)
カセット出版!

Karlo ¥120 (3)
イブニングのバカ (Ivan, la malgranda)

Novaj Esp.-historietoj ¥450 (1)
ホ・チ・ミン 獄中詩

- 人々のあつた中国の絵巻 ¥60 (1)
- La Varma Sudo k Prosta Nordo ¥60 (1)
- Ĉasado kun Avĉjo ¥70 (3)
- Sekreta Informilo ¥90 (9)
- Rakontoj pri Liu Mulu ¥100 (8)

- 空の美術館 ¥150 (4)
- Rentokolekta Kortoj ¥150 (4)
- Ĉerte venkos la popoloj de la usonaj agrestoj ¥210 (2)

LEGINDAJ LIBROJ

Viktimoj de la A-bombo ¥350 (9)
(原爆体験記)

Vilaĝoj en Batalkampoj ¥250 (1)
(戦場の村)

Vortoj de prez. Maŭ ¥100 (1)
この2冊の本は海外の文通仲間にも送ろう!

Elektitaj Verkoj de Maŭ Zedong ¥180 (4)
日本語訳あり!

I.U 語録集 (録音付書庫) ¥200 (2)

Songo de Makaro ¥60 (2)
ホバリの歌い、カマカガクスの歌い、

Sen Eliro ¥600 (1)
サレタの歌集 "出口なし" と "つやがけの歌集"

Brulanta Sekreto ¥150 (2)
これは面白い! 新書版

Kiso de Regino ¥150 (2)
山上政夫のユー・エ・ア 短歌集

Pardonon ¥200 (2)

ベトナム・ラオスで出会った春

La Morto de Jankio ¥120 (1)

Tagkajero en Prizonoj ¥150 (2)
ホ・チ・ミン 獄中詩

Senmatrikulaj Artilerianoj ¥150 (1)

- Kun la defendantoj de Honko ¥150 (1)
- La ebura kombilo 新選語彙の補綴 ¥140 (1)
- La Vjetnama Problemo ¥80 (2)
- Nord-Vjetnamio kontraŭ U.S. Aermilito ¥100 (1)

Mon Dat ¥350 (2)

Antaŭen sub la Glora Standardo ¥60 (1)
ベトナム労働党の歴史 de Oktobra Revolucio

Tra la liberigita zono de Laos ¥60 (1)
* V. スワンの政治論文

Dokumentoj de NPL de Sud-Vjetnamio ¥150 (2)

Kan Lik ¥480 (1)

Urinkejo de 1^a Mutalo ¥280 (3)

Unu Jarcento de Naciaj Luktoj ¥350 (1)

Indaj gefiloj de la Lao-popolo ¥150 (1)*

Pluvus sur la Arbaron ¥120 (1)

La Sovaga kokino ¥120 (1)

郵便料金の値上げで、送料がかなりかかります。差し支える機会のある人は
前もって連絡してください。書籍に関する問い合わせは;

沢谷雄一 063 札幌市琴似駅前番地4

振替口座 緑星堂 (株) 16388

印刷費寄附

tel. 611-1467

PIRATAJ ELBRONOJ DE LVS (コピー版)

"Kredu min, Sinjorino!" ¥350 + 200
努力の人がスィドゥーの 絶版に成っている傑作小説

"La eta princo" ¥250 + ?
esperantistoと自奔する人は 必読のこゝ!

"Verda Parnaso" ¥180 + ?
(星の王子さま) の海賊版風にかたり 有給者には花の山! (原本¥1,200)

I.U 練習集 ¥50
La Teksto Unu a

"Vespera Uruo" ¥50
本不明の名作

"プロレタリア文化運動の歴史的研究" ¥50
49 P.E.U.の部会からの文

伊東三郎著 "エスペラントの発展と構造" ¥30
と 機能

本 SES に 新選エス和辞典) 30冊以上あり
TERO に 新選講座 EIO-
m とし 入門書が 必携
ですので、各ロードで、初級
講習会と併用して
= 利用してください。

LEONTODO n-ro

年 月 日発行

発行所 北海道エスペラント連盟

060 札幌市南2.西4. 中央タイピスト学院内
TEL 251-4750
振替口座 (小樽)

編集

063 札幌市琴似町宮の森811-4

緑星堂

雪印育英寮内
沢谷 雄一
TEL 611-1487
振替口座 (小樽) 16388

北海道エスペラント連盟
振替口座(小樽)17075